古史傳

自第二十八段
至第三十二段

七

和書門
類 二〇二六一
號 五三
函 九
架 二二
冊

内閣文庫
和書
類 二〇二六一
號 二二
冊 一四〇
函 一七
架

國書第一号

内閣文庫
番號 和 20261
冊數 22 (7)
函號 140 183

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

大學圖書館藏書

古史傳七出卷

神代七出卷

平篤胤謹撰
男 鐵胤
孫 延胤 續攷

淺草文庫

故其速秋津日子神。速秋津比賣神二柱。因河海持別而。生坐出神名。沫那藝神。次沫那美神。

次頰那藝神。次頰那美神。次天
之水分神。次國之水分神。次天
之久比奢母智神。次國之久比
奢母智神。凡八神矣。

因河海ゝは。師云まゝ水戸は。河水の海ゑ落所の戸口ゐ
て。河口と云ゐ河ゝ海とゝ際ゐる歟。此神一柱ゝ。其河の
とも。ゐの已。

方ゐ倚坐し。一柱ハ海の方ゐ因坐てゐり。さて何を河ゝ
方。何を海の方とせむ。かゝ太祓詞ゐ。比賣神を。八塩道之
塩乃八百會爾坐と云ひ。まゝ上の山津見。野椎の例ゐも
依て。姑く日子神を河の方ゐ。比賣神ハ海ゝ方ゐ因坐と
定むゝし。河海ハ加波宇美と訓べし。常ゐ宇美加波ゝ云ゐれゝる故ゐ。河
海と書るをも。然訓てとゐれど。此ゝ河方の比古神ハ上
ゐ海方の比賣神ハ下ゐ。ゐの已。まゝ常ゐ何とゐく。宇美加
波といふとも。少異ゐれゝゐり。○持別而ゝは。師云。同水戸の内を。河ゐ
因れる方と海ゐをれる方と。二柱神の別て持坐ゝ云ゐ
已。さて持別而生とゐゝゝゝゐ。持別ハ此神とち
の凡ゝ上を云ゝるゐて。生ゐ係ゝるゐとゐゝ非ゝ。○
沫那藝神。沫那美神。名義。師云。沫ゝ字ゝ如く水の沫ゐ已。

假字ゝ阿和あり。阿波とかくハひゞ事ぞ。　那藝ハ水上の和とる意あるばし。或人も然云き。さて此ふ那美と對ゐるは。那美ハ水上ゝ騒ぐを云言ふて。波と云名もそれとゆ出ゐるあはべし。今云伊邪那岐。

伊邪那美の御名の。那岐那美と異あり。思ひ混ふべからぐ。○頰那藝神。頰那美神。名義。師云。頰ハ借字ふて。訓ゝ和名抄ふ。頰和名豆良とゐるふ依ばし。都良ハ都夫良の切ゝとる言ふゆ。其ゝ下第百四十二段。ふ。援田毘古神云く。其海水之都夫多都時之名謂都夫多都御魂。其阿和佐久時之名謂阿和佐久御魂。とゐゝ。都夫良ハ即都夫多都音ふて。其貌をも云ふゝ。沫を並びとはも彼と同きを以て知ばし。万葉十八卷ふ。このちのおとの都婆良都婆良ふ。とを色るも。

檜の水ふちはゝて。おぶふ。おりえおゞいおゝて。の舟ゝ。ぬみをはやみゝを。此都夫米。おとをばとち。ゝ。ゝ。ゝ

野の水分山を見れば二の犯しも詠るも此ふ。今子守と明神と

称して丹治村と云ふ在り。昔は水中址水分山ふ在りしを

年くふ山崩れしりぞ此ふ迂しとゆと云傳ふるとし。帳を

考まふ云ひ師云丹後国与謝郡篭神社ハ天水分神ふりと

云まふと古今六帖片恋題哥どもふ美許母理神と多くを

み清少納言ゞ冊子ふ神ハゆ云中ふも美許母理神ふり。

是らも水分を訛れる名ゝ吉野ふるをも後世ふは然云

ふり。○今云篭神社は嘉祥二年二月奉授従五位下と見

えさるを始め貞観六年十二月授正五位下同十三年六

月従四位下元慶元年十二月従四位上ふど見えさり。さ

て當国のふとを記せる書どもふ篭宮大明神は与謝郡

府中村ふりて一名は篭守大明神とも云里人は篭大

明神と云今在記ふは天水分神ふりとも云正一位篭之大

明神ゆと云額をうちと云ひまと同国加佐郡の方へ

開きて海中ふ周廻三里むと云ふりの島あり其を小島と云

社の轉れりて老人島大明神ゆを云ふヲレヽと云るは老人島

云式の篭神社ふ同国河守里大神宮の社人此社を預れ

へゆを社ふ是ふや。

く是探ふり。

ぬり。

べし。

宇陀郡ふ宇太水分神社。

當。○今母

○古史傳七

○四

里村と云ふ在り。と帳考ふ云ひ大和志ふ

む在下井足村と云ゆ何れゝ是ふらむ。

山邊郡ふ都祁

水分神社。大月次新嘗○和名抄ふ都介と作り。縣居大

人云今山辺郡鞆田村と云ふ都介山と云山あ

るべし。葛上郡ふ葛木水分神社。大月次新嘗○本ふ名神

ざれむ行ふるべし故上ふ挙さる三社ゆ例ふ依て除き

ぢれど名神祭式ふ載

ふ。さて此社を今関屋村と云

人云今葛木郡増村と云ふ在と帳考ふ云り縣居大

ふみこもりと云処あり。ふの。此社く何も清和天皇貞観

元年正月正五位下を授奉ゆ給へり。祈年祭ふ。此四社を

も祭給ひて。その祝詞ふ。水分坐水分神の坐所くを。皇神

等能前爾白久。吉野宇陀都祁葛木登御名者白豆。その坐

即水分と云ふり。

を。やゲて御名と云ひふせ稱辭竟奉者。皇神等能寄志奉

り。即上ふ挙さる四社ゆり。

牟奥津御年乎。八束穂能伊加志穂爾寄志奉者。此等の文

意を第

七十四段御歳神社処ふ此祝詞を引ゐれば其処ふ注べし皇神等爾初穂乎波穎爾母汁爾母聞閉高知張腹満雙氐稱辭竟奉弖遺乎波皇御孫命能遺乎と云ること餘の祝詞ふ例外なおとふるハ殊ふ此神を斗み坐るをしふるゆ外ふ故由あ事外ゆ朝御食夕御食能加牟加比爾考云是も朝夕の御食料の神穎ふして云ふり神を即神ふ奉れる遺と云よりうゆ是をも崇み云のみ加比を稲穂の名ふれど米はおとよも云例を御年神等ふ申ゆ文ふ云るゆ如し下ふ和稲と云も即米ふ長御食能遠御食登長も遠も祝言ふ赤丹穂爾聞食故丹赤丹とハ赤土を云且その赤き餘光を穂といふ万葉ふ紅ふ衣染まく欲けども著ふず丹穂や人の知べきふど云ゆ扱ふも御孫命の御病おもしまさば大御顔の赤きを申せゆ下神賀詞ふ赤玉能御阿加良毘坐と云も同じおとふり皇御孫命能宇豆能幣帛乎稱辭竟奉久乎諸聞食登宣と見えて祈年ふ此神をも祭

ゆ給ふを雨を布どとく分ゆ給ひて穀物のをく登らむおとを祈ゆ給ふふゆ右四社の外ふも式ふ河内国石川郡ふ建水分神社此社を貞観五年八月授従五位上建水分神正五位下同十六年三月授正五位上建水分神従四位下元慶三年九月授従四位上ふど御紀ふ見ゆ河内志ふ延元二年四月授正一位有額題云正一位建水分神其背面云延元二年丁丑四月二十七日勅授位記五年庚辰四月八日左衛門少尉楠正行書とゆるをし云ゆ今を祖水分村といふふ御社ゆり大野廣則云ゆ摂津国住吉郡ふ天水分豊浦命神社豊浦命と云を仁徳天皇の大名ふるばし帳考ふ在安宮おぞふ由有て負給へる御立町今称歩王と云り清和天皇紀貞観元年三月の處ふ安藝国正六位上水分天神授従五位下ともゆゆ此社今詳

あらば。○天之久比奢母智神。国之久比奢母智神。名義。師説ふ。久比奢母智ハ。汲匏持ふゆ。美比を約めて比といひ。碁濁れ。佐牙うゆりて奢と形を省ゆ。その省ける碁のれる。た。語の自然の勢ふり。其由は。鎮火祭祝詞ふ。火結神生給氏云く。水神匏乎持氏鎮奉禮。止事教悟給支。今云。此十二段ふ見えさ。と第ゆ。合せ考べし。但し彼は火神の荒ぶるを鎮炎む備ふ爲給ふといふ傳ふ。此も其れみあらば。水分神と同く。凡て万ふ水を施して功を成ゆむる神ふゆ。とのゆ。扨ての二柱も。上乃水分神と名も異ふれども。水を分ふ功ハ同じれれば。水分を云ひ。久比奢母智と云は。此ふゆる四柱ふわさる御名ふるべしさ

るは大和国ふ。水分神社と云四社あゆて。久比奢母智神社と云も外く。祝詞ふも。水分とのみ有れば形ゆ熟事狀を思ひ辨ふばし。

此時伊邪那岐命。大歡喜而詔曰。吾者生生子而。於生終。得三柱貴子也詔矣。爾其天照大御

神質性光華明彩坐而照徹於
天地故伊邪那岐命詔曰吾子
雖多未有若此靈異出子不宜
留此國也詔而即其御頸珠出
玉緒瑲瑲然取由良迦志而賜

天照大御神而詔出汝命者所
知高天原矣事依而賜也故其
御頸珠出名謂御倉板擧出神
是時天地相去未遠出故以天
出御柱擧奉天上矣故天照大

御神者。隨其依賜出命而。知看
高天原矣。次詔健速須佐出男
命曰。汝命者。所知青海原淳出
八百重也。事依給矣。爾此神亦
質性。光彩亞日神而。明麗坐矣。

大歡喜而。師云。古の言。古事記ふ往くゝ見も。大歡喜とも。歡
大は伊多久と訓ぢし。例て万葉七ふ。大莫逝と有り。まさ
卷ふ。極大 ども有り。伊多久てふ言は古事記ふ伊多久佐夜藝豆と
見も。痛の意ふて。即万葉ふ此字を數書ア。まさ甚字 をも訓り。さて
如此き大字。それ所ふ依て。伊登とも訓ぢし。其も意て同
じくれど。語の連ふ依て異るぞ。意富伊尓と訓ム。漢文読よて。古の格ふ
非ぞ。○子ぞは。師云。神のみ子ら。上の嶋国。青人艸社祖と
依。八百万神。まと万物をもうけて詔ふ孔ア。始ふ淡嶋を
不入子之例とある歟以て知ぢし。○生くゝ而は師云。次第
ふいと數多生坐るを云。行くて。戀くて。居くて。れぐひ

の古言なり。○於生終。師云。宇美乃波弖邇と訓ばし。万葉九ふ。夕塩之満乃登等美爾ふど有と。同じ語は格なり。此餘も此格なる多し。○貴子は。師云書紀ふ。珍子を書て。訓注ふ。珍此云于圖と有り。はさ大殿祭祝詞ふ。皇我宇都御子。皇御孫之命。をある。おれらを合せて。宇豆能美古と訓ばし。まと王篇ふ。珍字は貴也と云注もあれば。字も。然訓むふ難もなし。けて宇豆は。縣居大人説ふ。高く嚴きおを。なりと有り。今言ふ人の容貌を宇豆高きと云ふもとく叶ふ。なを例は。万葉六ふ。天皇朕宇頭乃御手以云々と云る宇豆。天地の神宇豆那比の宇豆も此なり。祝詞考ふ。宇豆那比と宇倍那比と一ッる解れしは非なり。まと諸祝詞ふ。宇豆は幣帛なども有り。扨此語

勢万葉二ふ。吾はもや安見兒得とは。を云歌ふ似されば。得は延多理と訓べし。○光華明彩坐るふて。其は伊邪那岐神の御禊祓し給ひて。光華明彩坐るふて。其は伊邪那岐神の御禊祓し給ひて。清まは竟る万へる撞賢木伊豆は御靈ふ生成給へるを。ふしふぞ依りむ。○天地。本ふ六合之内と有るを師の阿米都知と訓まとふふ依て。正字を書ず。○照徹は字は。まふ。氏理登保理と訓むも。ものし。ふは非ふども氏理和多良勢理と訓ばし。其は下ふ。味鉏高日子根神の身は。二丘二谷ふ映れる事を。妹下照比賣の歌ふ。美多邇布多和多良須と詠れど。映く状を。和多留と云は古言なり。今世ふも

光りわたるおど云、先り。①靈異。二字を連(ツラ)て久志備(クシビ)と訓ばし。書紀ふ久志備尓阿夜斯伎と訓るむ古語の格ふ非ず。けて久志備てふ言義ハ下第三十一段久志備濱の処ふ注ばし。①御頸珠師説ふ古も男女共ふ玉を緒ふ連貫(ツラヌキ)て頭ふも頸ふも手足ふも衣ふも凡て飾ぢしと云もさらおり。其中ふ火遠理命の御裝束(ミヨソヒ)ふ御頸之璵(ヒレタマ)見え。此事第百五十三段ふ見も。高比賣命ハ歌ふおぢ爲れぢとハうおがせる。珠のみくまふ云く。万葉十六ふ吾がうおげる珠の七條(ナツヲ)云くおぢのるを。頸ふ懸るおり。うおがせふも。うおげるも。頸ふうけるを云ぢ。大神宮式ふも頸玉手玉足玉緒云くとのぢ。安閑巻ふ幡比賣物部尾輿の瓔珞(クビタマ)を偷(タヌミ)て春日皇后ふ獻りしおとのぢ。是ふとれだ。當昔頸玉ふ貴き品あり。ぢと見えさり。けて頸を久毘(クビ)と訓ばし。今世ふハ犬猫おぢの頸ふ結ふ紐を頸玉と云も此古の名ハ遺れるおり。○今云世ハ頸ふ爲ふ久毘多麻と云おとあり。此を頸珠を懸さりし処おれぢ。今も其事おけきど。其語のみ遺れるふも有ばし。和名抄ふ頸頭(ハ)莖也とのぢ。ぢ云れ爲ふ玉を頸ふ珠を懸るおぢは知らふ〳〵を其珠を懸る本の由緣ハ。ハ此天瓊戈を賜ふ事ふ事起ぢ。魂(ハタ)の志ふしと爲て。第五段天瓊矛の処合せ考ふべし。壽命眞幸くと祝(ホギ)ハ飾ふ。頸ふうおげるハ本ふて髻(ミヅラ)ふも手足ふも懸るおぢ。ハは成ふ。ハ也。大殿祭詞ふ齋(イミ)王作等我。持(モチ)齋麻波利。持淨麻波利造仕禮留瑞八尺瓊能御吹支乃。五百都御統乃玉爾明和幣(アカルタヘテル)曜和幣(ヒカルタヘテル)乎附氐。云く。おの

御祭ハ御吹玉を献ㄆて祷白にをむ祢と為ある御祭ホ
ㄆ其ゝ宮内省式ホ大殿祭此云於保登能保加比と有て
保加比ゝ保伎を延さる語ホと文ホ御吹支乃五百都
御統乃玉尓明和幣曜和幣乎附弖と云て玉を主と為さ
るを以て出雲国造ゲ神賀詞を奏ル時ホ白玉赤玉青玉
辨ふべし
を獻ㄆて其詞ホ御祷乃神寶云く白玉能大御白髪坐赤
玉能御阿加良毘坐青玉能水江玉乃行相爾大八嶋国所
知天皇命と祷奏ルホどを考へ通して古ホ玉を帯さる
は祝乃飾ホㄆしおを戎曉ばしちて上ホ引さる大殿祭
詞ホ御吹支乃玉と有る御吹ゝ臨時祭式ホ御富岐玉六
十連と有る御富岐を同く富岐は吹の轉れる言ホて凡
て富久てふ言ゝ玉を以て壽よㄆ出さる言ホㄆ其ゝし第五十

一段天櫛明玉命ホ玉を作らゝむ○瑲く然ゝ本ホ母由
る処ホ委く云を見て辨ふべし
良邇と有るを師の邇ゝ辭ホㄆと云れ書紀ホ瑲く此云
母由羅爾をあ依て正字をかき赦モユラ迩の迩ハ辞ホを訓注ニッ
とも有ア衍ハ有ア
有る二の衍ホ如し師云緒ホ貫る玉をもゝ動ク
て相觸カヒフレ鳴ナルさはを云御誓段ホ瓊響瑲く而書紀本書ホ瓊響瑲
瑲此云奴儺等母母由羅尓と注せㄆ
葉十ホ足玉母手珠母由良ホ織る機を又十三ホ手ホ巻
る玉も湯良羅ホおど有ㄆまと十一ホ王響とも有まと袁祁天皇大
御歌ホ
鈴ホも云ㄆ万葉二十ホ由良久玉の緒と詠るも同じ由良

久の久を濁るハわろし。何処も皆清音字を用ひさり。さて由良尓。由良く尓おど云ときた鳴貌おり。由良久た鳴を云れり。ちて右の中ふ。万葉おるは。みお母は辭おるを。足玉母手玉母といふ。書紀の訓注ふ。母字二ツ有るもて知らる。其上の母ふて知べし。此おるハ辭ふ非ず。た辞おゆ。眞の意おるべし。○取由良迦志而は。御手ふ執持し振搖して。今瑲く刀ゆ。おれ下ふ云るを見べし。○賜ハ。多麻比弖と訓べし。師云。タマハリテと訓ハ非おり。あまハるは。被賜ふて。其物を受る人ふ就て云言れゆ。万葉十六ろ。被給而とゆるた。即さるを尓て刀り。故ふ被字を添さり。凡て多麻布といふ言た。天神の瓊戈を賜へる事。まゆ此御頸玉の故事を尓ぞ出おらむ。ちて如此御頸玉を賜ふた。既ふ国土まと青人草。万物をも生竟ゆるひて。其を幸ひ坐ばき神とちをも生給ひ。

生の御終ふ。これ大御神を生得給ゆれど。天神の御命蒙尓坐る御功業の立ぬるおとを大歡喜坐て。有ゞ中ふも。此御子を愛く貴く所思看して。是よ尓以後た。世ふ霊幸ひ坐ば御德を盡ふ此大御神ふ禪り給ふ御璽ふ。賜へ尓と知られと尓。下ふ。日之少宮ふ留坐ば由見えさるも。然給ひしふた。然有れむ。聞えとり。誠ふ此大御神を生得ことうばるゆけり。その玉緒瑲くふ取ゆらかして賜た。然御德を禪尓ゆるふと爲ては。大御神の御壽を遠長ふ天足し給へと。禱坐ての御爲おる尓。ゆゞふ歡坐ての御爲と思ふた委うら。其た神武天皇卷ふ舉さる。櫛玉饒速日命段ふ。天神れ種くれ玉を依給ひて。其御言ふ。若痛所あらば。此十種の

寶を合せて布留部由良由良止布留部如此爲之則死人
將生返と詔へる故事の御鎭魂祭の本ふて職員令鎭魂
は義解ふ言招離遊之運魂鎭身體之中府故曰鎭魂と見
えてその御祭は時ふ御衣は筥を振動ろは事の後まで
遺れる形どを思ひ通して曉べし。おホ言は萬葉二十
箒を賜ひれるふ大伴家持卿の初春の初音の今日は玉
箒手ふ犯るうらゝはやらく玉は緒と詠れしも天皇命の
祝て賜ふ大御心をうけて古の賜ふ玉箒を手ふ犯るゞ
まふ〳〵躰の活動栄て寿命乃眞幸く延る と詠れし哥
おは此外はも哥詞ふ死ることを玉の緒は絶ゆ云も
古は命眞幸くと飾れる玉は五百箇は珠を緒ふ統通し
て頸ふ懸とは故は其緒の絶るをバ死る兆として云
るおゆれは玉緒と詠る古き哥どもを委く考へて悟る
べし。まと下ふ大國主神の須佐之男大神の天之沼琴を取

て逃返は坐しも此謂ふ因る事ふて須佐之男命の國土
を作り固るふ法き御魂を承賜ハは給ふ御所爲ふは。
此は第八十六段は云ふを見て合せ考べし。ふは此神のうれゞせる瑞は八尺
瓊を披て御孫命ふ奉は給へるも現事顯事を讓り給ふ
御志ふは殘し給へるふは。此事は第百九三段ふ注り合せ考べし。ちて人
の魂を多麻と云ことも是ふゆ出る言ふは其は產靈
神は產靈の御魂を瓊戈ふ託て二柱神は賜ひ今まと伊
邪那岐命は御靈は御璽とる御頸玉を大御神ふ賜へる
殘思ふは神も人も產靈神伊邪那岐伊邪那美二柱神の
御魂ふ依て魂をも託てかく生出る物ふて身ふとは

ては。魂ぢうアやおとおお妃物の外き故ふ。うち任せて。魂を多麻とは云ふらし。おれ殊ふ深く考へて曉ばし。○鋏胤云。多滿と云物ハ。古へ神も人も。徒ふ愛する物外り。とれみ思ハむと。一アさりの説よて委ゝらば。然ふハまづ。人の靈魂も。神より賜ハれる物ふるを。我身おがらも。其形狀ハ知べゝらざれど。神の御上より御覽さむよハ。必玉れ形ふるばし。然きぢ。魂を則玉として。此を全く齋き持てるを。命の長ゝるべき徴とて安るふふべし。斯て御統れ玉て。又それ多滿を幾つゞも外く。安べ結ばるを云て。弥倍ゝふ寿命の常とハふ長ゝらむ事を祝へる物ふるべし。其て字とそ異れ。玉も靈魂るも。同く多滿と云へるをもて辨ふべし。けて玉を頸ふ挂る本れ由て。かく滾き謂の有ふとふるを。世ふ美玉ばゝり麗しき物をふ妃故ふ。本は魂の去ふし外るも。後よて自然ふ。その麗しき玩愛しむ方ふも移アて。何とふき玩物とも爲さアと去外

り。其て却ニ祟神ヲ詞ふ。見明スル物止鏡。翫ル物止玉。射放ル物止弓矢。打断ル物止太刀。馳出ル物止御馬。と見えるを思ふべし。かくてはと石屋戸段ふ御統の玉を奉れるふとは。翫ル物の如くふも聞ゆれども。此て玉と殊ふ滾き由ある事と思ハる。其はふの時ふ奉まる御玉を。後ふ御孫命の天降坐ふ時ふ。天ふ日嗣れ御璽として。賜へるを思ふべし。此事。第百三十三段の傳ふ云べし。扨まと漢土天竺外ぞ。其餘の国ゝふも。古くは玉を佩もし。う外ぎも去るを。漢土ふては。温潤の德ふ比して佩るふどさかしげふ云ひ。天竺よて飾ともいひ。或て唱言の數を記ゆる料の物ぞ形ど云て。本れ謂を失ひ果ふるて。末国ふきぢ。據考ふばき古傳の失さ

る故あり。然るを祖国とある御国の尊ちふ。其本は謂をも。かく伺ひ知らぬ事ハ。ゐもく辱ぢ事あゆゑし。

○汝命ハ。師云。那賀美許登と訓ばし。賀は之あり。續紀宣命ふ。奈賀御命。まと武内宿禰歌ふ。大雀命を指奉て。那賀美古ともを免る。此等ふ依れり。前ふも云る如く。後世ハ。汝ゐ云は。卑めとる稱ふきども。上代ふは。尊む人をも云り。故命とも云へるあり。神武巻ふ。神沼河耳命。御兄を指て那懸乃山口坐神等を指ても。汝命と詔命給へる文見や。○高天原ハ。師云。ゐはち天泥汝命とも詔ひ式の祝詞ふ。倭六御あり。然るを。天皇の京を云ふど云る説は。太じく古傳ふそむける私説ふゆ。凡て世の儒者らみふ漢籍意ふ泥に溺れて。神の御上の奇霊きを疑ひて。高天原の事実を信ぜ。何くまとさうしら説ゐるハ。ゐと愚ふり。

くてゐ。天と云ゐ。高天原と云ゐの差別は如何と云ふ。まず天を前ふも云る如く。天神は坐まゐ御国ふるゞ故ふ。山川木草のゐぐひ。宮殿そのゆう。万の物も事も。全皇美麻命は所知看ゐ。此御国土は如くふして。ふゆゐぐれゐる處ふしあれど。かゝるふとゝ。もは漢籍ふ謂ゆる天説ふ惑ひて。正ふき神代の傳を勿説曲そ。凡て外国ふハ。正しき古傳説の無ゐ故ふ。天の実はさまをば得知ら空理をのみ云ふゆ。大方は。ふはさは。神さちは御上は万は事も。此国土ふ有る事の如くふふむ伺るを。此は神代の天の事実を見て知べしみ。高天原とも云は。其天ふふ正しき太古の傳説ふ。して有る事を。語るとゐの稱ふ。然るを万葉哥ふどふ。天原ふりさけ見れば。

とよ免る外ども。〳〵後の事ふるべし。如此さまふ多ぐ打見さるのみに空ふどを。天原と云るが如きも。神代の御典ふどふも見え無事ふり。けて然稱ふ由は。高とい是も天を云稱ふて。ゆゑふ高き意ふ云るともいけ〳〵ろ異ふ卍。然れど此高い躰言ふ卍。日に枕詞ふ高光と云も天照と同意。高御座も。天の御座と云ふとふて。是等に高も同じ。まと高行や隼別ふど は。仁德卷の哥ふあり。虛空を高と云ふ卍。此も高く行と云まい非ず。抑天と虛空をも別ふれど。精くも分て云るふともふれども共ふ上方ふあきば。此國土よ卍も。天をそらゆも。虛空を天とも通ハし云も常ふて。天ふそらふども云り。さまど高ゆ云も。天と虛空とを通ハしさる名れり。共ふ高き方ふあれど也。今世ふも。天ふ虛空を然言ふこゆふ卍。物の虛空ふ高く ふど云免り。但し此も。天下ふのまゆく云ふい非るろ知らば。此伊勢國ふどふてもを卍〳〵然云を聞くふり。古

言の此ふきるれるべし。原とは。廣く平ふる處を云。海原。野原。河原。葦原ふどの如し。万葉哥ふ國原とも。ふの卍。かゝまば天をも天原とは云外卍。之原と云例も。海之原ふど。其ふろもふり。高天が原ゆ唱ふも非ふ卍。○今云。祝詞ふ。高天之原とかけるもて知べし。けて其ふ高てふ言を添て。高天原とも。此國土よ卍云こゆふ卍。凡て天を高とも云も。高きを以て云。稱ふればふり。されど古事記ふ。天照大御神の。天石屋ふ隱坐る處の御言。天原自闇云く。まと書紀の。須佐之男命に。天ふ上坐時。まと御誓に處の。天照大御神に御言。必當奪我天原云く。ふどふも。皆多ゞ天原と云卍。其も天ふして詔ふ御言ふるが故ふ卍。然るふ神代紀下卷ふ。同大御神の。吾高天原と詔へる処の一ふのるは。撰者の何心もふく書れさるゆ。いかふもふき。多〳〵此ふをもて。

おぼてを疑ふべきふハ非ず。おれらの餘此国土よりこそ云へ
多ぢよ就て決むぢぢものぞ。
ふとおろふ外む。高天原とおてゐる。凡て古文はかゝふこ
ゝのいと正し。ぢおこそ。○所知ハ斯良世と訓ぢし。斯礼を延さる
言外り。おゐ此詞のおとむ。下ふ師説を舉て委曲ふ注へこそ。
事依而ハ。上第五段ふ注る如く。事を其人ふ任せて。執行ハ
ぢむる意おこそ。おゐ彼処ふ云るを見よ。○賜也む。右の御頸玉を賜ふ
こそ。かく重祢て言ハ。古言の常ぞ。○御倉板舉之神。師云。こ
は御祖神の賜し重ぢ御寶として。天照大御神の御倉ふ
藏奴。そ此棚乃上ふ安置奉て。崇祭さるひし故ぢ御名ふ
るぢし。今云。多ゞは御宝と為さまふのみおらぢ。御父神
の御霊幸ひの御璽おきバ。然有けむとうぢふ

ざめ
ゝる。ちて板舉は。垂仁紀ふ天湯河板舉てふ人名ゐこそ。板舉此云拕儺と訓注あり。板を
高く弩舉て。物置所ふ構る故ふ。如此書るおらむ。字鏡ふ。
棚閣也太奈。和名抄ふも かく見ゆ。とゐこそ。常ふも此棚字を用ふ。万葉
ふも。多那てふ言の借字ふ。此を書こそ。さて御代御代ふ傳へ
坐。三種神宝ぢ中ぢ神璽ハ。此御頸玉おりと云説ゐり。理
むまことふ。然も聞ゆきども非ふ。○天地相去未遠。相去を師
り。其由む第百三十三段ふ見ゆ。
の阿比太と訓れとまど。おぬ。
波那留〻許登ぞ訓ぞよき。
まざいくおどもゐらぢる代おきバおゆ。と云き。抑天
ハ初葦牙の如く萌騰れこそ。しを漸くふ高く騰りて。終ふ
は今現ふ見るゞおと。位處の定れる。其さはを想ふ
ふ。二柱神ぢ国土を畫成ゐまこそ。殊ふいと近ゞ

ひしさはゐ見え其後ゐ伊邪那岐命の火神を斬給へる時の有狀を思ふゑ其御骸も何も天ゐ上ひゐるゐど。ゐゐ間近く聞え此ゐも如此相去未遠と云るを皇御孫命ゐ天降坐る時の狀を思ふゑ排分天之八重棚雲而稜威之道別道別ゐどいを遠く聞もるをまゑ此後ゑ天忍雲根命の天水を取ゐ上らゑ〳〵時ゐどゐ不殊ゐ遠く聞えて其上らゑ〳〵功績の別ゐ高く聞もるゐどを思ふゑ初萌上ひし時ゐいと近くそれゑひ漸〳〵ゐ遠く離れて今の現ゐ如くゐハ成れるゐめ是ゐと二柱の產靈大神ゐ神靈ゐ依て如此有らでは得有まじゐ。深き理ゐ具れる古とゐるばし。釈紀ゐ漢籍三五暦記を引て天日高一丈地日厚一丈盤古日長一丈如此万八千歳天數極高地數極深盤古極大後乃有三皇云〳〵故天去也九万里先師說云神代天地相去不遠尤叶此儀歟と云る如く此ゐ彼國ゐも。○以天之御柱とは。師說ゑ縣居大人言ゐ此古傳の有しことゐ古そ。天柱ゐ伊邪那岐大神の御息ゑて風ゐり立田風神御名を天御柱國御柱命と申ゐを合せて云るべし。と云れき信ゑ然るべきゐり天を地との間を支持もものは風ゐきバゐり。と言きされど此ゐ下ゐ見ゐ天梯立を云ゐゑて其を天ゐ登ゐまふ御足溜と云て登せ奉ひ給ふる由ゐゐべし。私記云天照大神光華無雙故以天之御柱為其登橋者是時天地相去未遠之故也或說凡云天柱者是天神先所賜瓊矛也方今洲國已生万功皆畢故以其瓊矛返上於天也說者云此說非也彼矛即為小山也然則傳自彼山登天欤是以天柱為其橋之義也[redacted]公望私記云天柱者瓊矛也此矛為山傳自彼山云〳〵以ゐ余理と訓ゐし。猶第三十一段

ふ云を見ばし。○舉奉天上矣。天照大御神を。かく天上を知看に神ゝ定給ふた。その御德は廣大く。大御體の光華明彩坐して。天地の裡ふ照徹坐し故ふ。天は清明ゝる御国ふ。相應くおもかちゝのば。其君とは定賜ふはあらむ。或人問伊邪那岐神の大詔命ふ依て。大御神の天上を所知看にふ就て思ふ。伊邪那岐命ハ。貴しと申せども。ふかゝ天上また。御祖は天神坐まに。を御親の御心を。大御神を天の君と定給へること。初め不良御子を生坐る時に。天神は御心を問給へはおどは合せ考ふ。御心のはゝふ御為の如く聞ゆるハいらふ。答此た然も有べき疑れゆ。然た有れど熟事。状を想像る。初め天神は。その神霊の御璽と。あれる。瓊示を賜ひて。此国土修固よと御詔依し給へふは。国土造るべき基を成より。はじ始て。神さちを生給ふまは。で。ふ係りて。神代の事實は。とあるもかゝ。命は因おくを思ふ最終は此大神の生坐るも。悉彼大詔。知看ことた。固よりは如此有べき。幽き理は。そふた高天原を。れる事は。ふ云を淡島蛭子ふどを生給へる時は。天神の御心を問さ乃へ。るた。不良幽御子ふるから。ふ奇しみ坐て。其疑を晴れむとして。問は上り坐るふはをや。けて此大御神ハ。此の大命は。ふ〳〵。今目前仰ぎ見る。天津日は御国ふ坐くて。四海万国を見霽し。知看し坐まに。ふと。申に也更ふ。然るを世は。此大御神を。大和国。或た近江国。或た豊前国。或た常陸国。は都坐。ふど云説の聞ゆるふ就て。師言ふ此等凡て皆いみじき邪説ふり。まは。ふ〳〵。天皇の大祖は坐。故ふ。其於此邪説た。天照大御神ハ。ふ〳〵。天皇の大祖は坐。故ふ。其德を天日は配て。日神と申はそあれ。実た天日の神を申ふた非ぬと思ひ。まさ天を空虚のふと〳〵。誤れる後世意は。天ハ。ふ〳〵。気のみは。て。形躰ふき物ふる。ふ此国土は如く。さま〳〵。は事を云るハ。決也て有まも也理ふれぬ。高天原と云るも。ふ〳〵。皇都のこと。は。て。其事実たみふ。此国土は。ふ。ぬ。ぬ。ぬ

理のある事を得知らぬを此方の人もひとしく其をも凡紀
たれとも思ひ習ひて動にきバ神代れ奇事どもをも
心れ常理ふ強て當むと云る返くも謬れる事ぞかし
そ中ふ此大御神の都ハ某国ぞふど云ふる事ハ殊ふし
甚じき強言ふ此ふ国土ふ坐くあり抑これ大御神を天日の神ぞと別ふて
此国土ふ坐くあり抑これ大御神を天日の神ぞと別ふて
ふ説ふ安べきぞ當時ふばらく隠ぞ坐ふ段ふどは
の説を若既ふ崩坐ふバ況て其後ぞ世間ふ有
ばきふさ事ふく常ふ明れく照し給ふをバいふ常夜ふ有る
云むふ若てまと崩まさで安ふ此世ふまし坐と云はぐ人
の云ふ代ふ後ぞ何処ふ移坐まにとりせむまと何故
代ふ国をバ棄ふ坐ふ国ぞ凡て心得安果しり人
其都坐ふ国ぞ棄ふ坐ふ物ふ皇御孫命
大和ふまて相続て其都ふ坐ふ物ふ所知看べきふ
和まれ近江まて中土の都ふ西辺の国へ降し奉り給ふ
まれ近江まて中土の都ふ西辺の国へ降し奉り給ふ
ふ坐まして天下ぞ天下ぞ看べ給ふ
ふ坐まして天下ぞ天下ぞ看べ給ふ
ふ坐まして天下ぞ天下ぞ看べ

哥ふた。之良志賣之とも處くふ所ア。志良志を志呂志と云た。所聞看を。伎許志米須と云ふ同じ。看ハ見ルをア。但し常ふ使人見を見ル。と云ヲた異て。多く見を美須と云見給を美志給と云。一ッの古言をア。立をさ〜ル。立をさ多しと云格あり。此例た万葉一ふ。埴安乃堤上ふ在立し。見之賜ヲバとあア。今云。おれ例を挙られとるを。今たその一ッを記し出しれ。ちて此見之を賣之をも通ハし云、るは。万葉二ふ。召賜らし神岳の。山ハ黄葉を云く。明日もうも召賜ハまし。おれら見之多乃ふまて。召たみを借字あり。十八ふ。吉野の宮をあアろをひ賣須。見ルあり。二十ふ。大君乃賣之思野邊ふた。先ち〜た見ち〜まて。下の思は。過去しまと。ば。ル。ア。かく〜きば所知看ふぎの看も。本は物を見おを。ル。る

を。国を治ス有坐こをふ通はし用る由た。次段。夜之食国の處ふ云るゥ如し。万葉一ふ。藤原ゥう子ふ食国を。賣之賜。年と。二ふ。吾大君の所聞見ル。背友れ国の。おどるるふていく〜明ラけし。さて此看ふ食字をも書ハ。物食と物見るとを通ハし云こと。是も夜食国の處ふ云ゥし。今世飯を賣志を云も。食物ある故あり。まさ人を詔を賣須と云も。見ルよアも出さるべし。○まさ万葉二ふ所知行を書ると。の行字のことハ。倭建命段ふ。ちて天照大御神ハ。此の御看行と。ある。彼處ふいふべし。事依のまふく〜。天地の共無窮ふ高天原を所知看て。天地ハ表裏をく乃ふく御照し坐まして。天下ふあらゆる万国。此御靈を蒙らばと云こを無けきば。天地乃限の大君主ふ坐くて。世ふ無上至尊きハ。此大御神ふれむまし

ましをは。此より先ま高天原ふ既く五柱神な坐ませども、いろど高天原を所知看と申せるこをあれば君主とな申しゲ多し。君主な多ぐ此天照大御神ぞ。初まな坐ましける。然るを世ま天之御中主神或な国之常立神ふどをも君主の如く説ふ安な古傳ま達へ已然りとてまと彼神等を人臣神と申さむも非ふり君ふら爰ぞ。何でゥ臣とハ云な人の世な意を以て天地の始まも君臣の分を説むとにるな漢意のひゲことふり。ちてまと四海万国此大御神の御光を蒙り御霊を蒙已ふゲら其初の趣多も知らば此御国ま生坐るふをまも知らず知らず。皇国な安ぐれて斧きこをも安ばて知らず。てふるハ外国まハ凡て神代の正傳説のふき故れ已。

ぞ言れと体如く。此大御神高天原な御門おし張り。見霽し坐て恵み給ふ更ふも白さば。その見霽ゥし給ふ国の盡天皇命ふ寄賜ふこをま外も坐ましける故その祈白ば宣詞文祝詞式祈年祭六月十二月月次祭條ふ見め。ふ伊勢爾坐天照大御

神能大前爾白久皇大御神能。本ふ大御の二字を脱しと二所ある例ま依て補なれとるぞよき。見霽志坐四方国者。此文まと垂仁天皇巻ふ記せる大御神の宮処求段の御詔ま我坐高天原而熊戸押張原如見見求之国宮処者是也と詔へる御言ま依て大御神の天日な御国ふ坐まして四海万国を見霽ゥし御照し坐にこと知べし。ふかしこ。さて熊戸ハ御門の借字ふり。

天能壁立極考云天の壁な如く四方ふ側て見めるを云やあり。国能退立限考云国な地と云ま同じ退立な遠放立と云ま同じ立ハ上の壁立の立な如し。仁徳巻哥ま雲放き曾岐遠理とも詠ると合て知べ。

青雲能霜極。白雲能隊坐向伏限。青やいひ白やいふな言をゥし有り。青雲能霜極ふ大御の二字を脱しと。

冗て文をふせるふて万葉の長哥ふ多き言ふり向伏とな遥ふ向ひ見ふま墜伏てある雲の限を云ひて万葉ま天雲の向伏国と見えと合せて其意ま辨ふべし。○上文ま天と云ひ国やを云ハ上下をいひ。ふ青雲云ふ。白雲云くやをふるハ四方を云るふり。

青海原者棹柁不于。青海原のことな第五段ま注る如

くあるを此れどハ海を云ふなと〳〵あまる故ニ此ニ如
此あり初ハ伊勢尓坐云〻と云るを以てや〳〵後の文あ
ることを辨ふべし棹柁不干て船の間もなく通ふを云
仲哀天皇巻ニ新羅王ガ言ハ不乾船腹不乾施檝云〻と
云るをも合せ考ふべし舟艫能至留極下文ニ陸を云とて能
至留限と云るニ同く舟の渡
り往べき限を大海爾舟満都〻氣氏下文ニ陸を云とて
云る文あり長道無間云〻
云ふハ自陸往道者荷緒結堅氏陸より奉る貢物て馬ニ
同じ負て緒以て結堅むる
をかく云あせり万葉ニ東人之荷向乃篋
ハ荷緒ニもとと処るあど思合ばし
久彌氏磐根木根履佐
通行て御調ニ勤むさまを云なあり
限上文ニ海を云とて舟艫能至留極を云る
ハ同く馬の通ひあるべき限を云る文ハ
久立都〻氣弖上文ニ海を云とて大海尓舟満都〻氣
弖と云ふニ海を云とて同く道の長手の間あきばろ
ハ貢物の荷馬の
立ぶ〻くを云へり狹国者廣久峻国者平久狹国峻国ハ
御調進るよ

としてハ其道の狹く峻く物進るまさる事の有べき
を然ることあくと云をかく云ひあせハ長道無間久立
都く氣を云るよハ引連て其意を辨ふべし遠国者八十綱打挂氏引寄如事
崇神天皇の御世ハ七年ニ戒人の初て参來しよハ以來
三韓も更ニも云ハバ餘の国〻よハも次〻ニ貢物奉ハ
しあと古ハ多うハしうば其を八十綱ろ
けて引寄ゐあとれ如しとも云ひあせり皇大御神能寄
奉良波右の事ぞも皆此大御神の天皇命ハ依給ふ御事
ゐるを以てかく云ハ其も御孫命御天降の段ニ
大御神の御言ハ葦原中国を知看せと御事依し給へる
も此国土を並知看せと詔へるひやしき御言ゐるこ
ぞを彼段ニ委く云るまさ仲哀天皇の御世ハ御託まし
て韓を征し免給ゐあと上文ニ宣へる事の此国
土安ばてを云る文ゐ依を以て天皇命も此国土を並
治看安べき大君ニ坐して それ即大御神ハ御依ゐる古
意を辨べし荷前者諸国より奉る御調の初物を朝廷ニ奉ハ
ふべし大内と ハ伊勢大御神を始て諸陵へも
奉ハ給ふを云万葉
考の別記見るべし皇大御神能大前爾如横山打積置氏

此れ例多くある文ふ殘乎波平久聞看大御神へ奉給へる
て聞えさるゞ如し。殘を天皇命の嘗看
ればよしあり。御守みのわど知べし。○又皇御孫命御世乎。
久字本ふ無きを例ふ依て今補ひぬ
手長御世登手長れ足長の畧言ふ
言ふて祝言あり。堅磐爾常磐爾。おの二ツれ尓
れ如くふ常磐れ如くふと云を畧れる辞ふ
ぴ万葉ふ多き格あり。を云れさるゞ如し。齋奉茂御世
爾幸閉奉故御命をも常磐堅磐ふ茂御世ふ齋幸奉まれ
を以て云皇吾睦師云皇れ天皇を申れ凡て須賣良賀云
るあり。云と云こと宣命ふどふ例多し。睦ハむ
ぬまし妃を云天照大御神れ皇孫命の御祖ふ坐こと更
ふも申さゞ高御産巣日神も外祖父ふ坐ぬ共ふ親しき
御生祖あり。さて是ふ世ふ皇親とぬらねて読慣へる
宜しのら云皇を離して親神岐ぬ彼り読ばし。彼孝
徳記ふ我親神祖と詔ひ出雲神賀ふも親神魯伎と云る
きゝ又此親れ次ある神漏美へもかゝる詞あり。を云れ
とるゞ神漏伎神漏彌命登神漏伎命とは高皇産霊神を
如し。申し神漏弥命とれ神皇産霊

神を申云御称ある。此ふ大御神一柱をかく称せる
とれ上件の御幸ひ坐ゝ故ふ別ふかく斗み称奉ゝ
あり。其れ女男二柱ふ申云言を大御神一柱ふ称せふを
以て辨ふべし。故命登と云るあり。此登れ神漏伎神漏弥
命登称奉氏と云意の登あるふよく思ふ宇事物頸根衝
べし。委くハ第一段ふ云ふを合せ考てよ。
拔考ふ鵜鳥ゞ潜くふて頸を倒ふ水ふ衝入るゝを人の
頭を地ふ抜き敬ふふ譬さり且頭根れ首根あり。頭を
倒ふれるふハ先頸ゞもとあるを以て云事物れ即それ
物を云辞ふて万葉ふ鴨自物水ふ浮居てと船の浮びあ
る城云ひ宍自物膝折伏氏ゞ人の膝をかゞ伏て敬ふふ云
譬とる類あり。衝拔れ突通れと云ふ同く事を強く云
ありとれぴ此説の中ふ事物れ即その物を云辞と言れ
しれ達へり。此れ師説ふ鵜の如く鴨れ如くゞ云意ぞゞ
云きとふふ従ばし。ちてふれ御孫命れ御命として帮
帛を奉る人れ大前ふ畏まりて捧るさま戎云るあり。皇
御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と云る戎熟讀
み熟辨ふぼし。○青海原淳之八百重青海原ゞれ。上第五段

ふ云へる如く。大地全を云ふ古言なるを。淖之八百重と連
祢云ふとて。おゝ廣く委く云るふて。八百重の波れ重疊
りて。至ア極る極みを云て。祝詞文ふ。淖沫能留限と云ふ
同じ圧ふり。おゝ眞柱ふ著せる図を見て。此国土の狀れ。
淖之八百重と云ふべき物なることを辨ふ
べし。此れふ淖之八百重を。大祓詞れる。塩乃八百會を。一ッ
ふ意得さる説どもの聞ゆるて。委く思ハざる非言あり。
まさ公望私記ふ。云ハ八百重欲明海水之甚深矣。然れど須
言海水之深如重八百也といへるも非ふり。
佐之男命ふかく依し給ふて。此国土を。并所知看せと
依給へるふて。此て天照大御神ふ。可治高天原と依し給
ふふ對ふて。天と地を依し分け給ふこを。二の御目
よア生坐せる。二柱れ珍子ふ坐ませど。かく御出ばきさ

を。理の至極ふぞ有れふ。おゝ第六十五段須佐之男命の。
天壁立極廻坐ちく処第百三十
四段皇御孫命御天降の処ふ
云ふ言どもを合せ考ふべし。○亞日神而とは。天照大御
神れ大御光の。天地れ裏ふ照徹ア給ふふ亞てれア。然れ
ど須佐之男命れ御光て。大御神ふて劣ア給へるふアれ
ゆ。此て畏れれど。然もけて此段の傳れ趣ふて。天照大御
おハばくあむ。
神。速須佐之男命れ。大御體の光ませるふと。更ふ論ひ無
きを。此ふ就てふゝ熟く思ふふ。神代の神さちは。此二柱
のみふらば。御體の光ア坐しけるふやと思ふ由ふア。其
て味鉏高日子根神れ。天稚日子の喪を吊ひて。天上ふ昇
坐ちく處ふ。此神の容儀華艶まして。二丘二谷れ間ふ光

映せるかと。其處の文ふも歌よも見えとふを。天稚日子の父。及妻子おどれ。天稚日子ふ見混(ミガ)ゐる我思ゐバ。天稚日子も高日子根神と同貌よ光まゐしれゐ。然らばハ見混ふべくも非ぢゃ。まと猨田毘古(サダビコ)神ぜ。天之八衢(チマタ)ふ參迎(ムカ)へ給ゐる貌(サマ)を云へる處ふ。上て高天原を光し。下て葦原中國を光しゐゐ。と有(ル)を思ゐば。此神も御身の光(リ)ませるかと炳(シル)し。まと豐玉毘賣命の。御子產むとして來ゐ乃へる時よ。海を光して來坐れば。御身の光ゐ坐るかとて云までもかく。又あの比賣神ぜ。火遠理命よ獻り給へる御哥よ。赤玉て緒さへ光まど白玉の。君ゲ儀しゐふとく有れり。と詠ませるを思ふよ。此も只よ玉ふ寄ゐとは耳ふて非で。火遠理命の御躰の光ゐ給へるふらむ。とさ思ゐる。まと人世とおゆても。神武天皇卷ふ記せる井光比賣の故事。まと伊勢都比古命の。伊勢國を去る時ふ。海を光して去れる。はと允恭天皇ぜ后。衣通比賣命ぜの事よ思ふよ。人世とおゆてどよ。かく名乃へ體ぜ光れるも有しらば。神代の神等ぜ御體の光ゐ坐しけむかとて。然も有ばき事おゐかし。猶言ば。御孫命の御天降ぜ事議(カ)ゐ爲給ふ處よ。如螢光神(ホタルカヾヤクカミ)。如火蛇光神(ホベカヾヤクカミ)おど見え名るて。邪神どもぜ光少きを云へるふて。此て正しき神とちぜ光の大(キ)おるふ對(ムカ)ゐて。螢おゐと云ひ。火蛇おゐと云ゐと聞ゆれて彌。まゐ〳〵神代の神とちの。何まも光ゐ坐るふらむとは。推量(オシハカ)らるゝれゐ。然るふ誰(イヅレ)神もみおゐ光り坐せる事

の見えぎるは。然る事實の因れあき故ふて。高日子根神。猨田毘古神の御體れ。光坐るおとの見えさるふどい。多乃さま事實ふ由有て。傳へ遺れるよぞ有れば。事狀を深く考へて。此謂を辨ふばし。けて神さちの御身れ何も光ませる中ふ。天照大御神の大御光を太じく。其ふ亞てた。月夜見命ふ坐しうば。此二柱れ御光のおぞれみを。殊更ふ語傳ふさるふらむ。かくて此二柱神れ日と月ぞを知看て。夜と昼ぞを持別さるふ事も。幽き由あることおるべし。ちて上ふ云へるは。現身れ光ア坐る外ふを。御魂の神れ光ア坐ふた。大國主神の和御魂。大物主神れ。海を照して歸來給へるゞ。書ふ見え多ふるを始終て。其外數るふ暇あらぞ。

爾健速須佐出男命。不治其所命。出國而。八拳須至于心前。哭伊佐知恚矣。其啼泣出狀者。青山如枯山。泣枯。河海者悉泣乾。亦勇悍安忍而。人草多夭折矣。

故伊邪那岐大御神。詔速須佐
ノ ヲノミコトニタマハクナニト カモ イマシレハ ズ レラサ コト
出男命曰。何由哉汝者。不治事
ヨサセル クニヲテ ナキ イ サチ ルト ノリタマヘ
依出国而。哭伊佐知流耶詔出
バ マヲレタマハク ア ハ オモフマカラムトハノクニ ネ ノ カタ
則答白。吾者欲罷母国根出堅
ス クニニガ ユヱニ ナク ト マヲレタマヒキ コヽニ イ
洲国出故。哭也白給矣。於是伊

邪那岐大御神。大忿怒而。然則
ザ ナ ギノ オホ ミ カミ イタク ミイカリマシテ レカラバ
汝者勿住此国。汝治此国則。殘
イマシレハ ナ スミソ コノクニニ イマシレラ コノクニヲバ ソコ
傷多焉。任情所知夜出食国詔
ナフコトサハナラム マヽニコヽロノ レラセトヨル ノ ヲスクニヲノリ
矣。故速須佐出男命白曰。然則
タマヒキ カレハヤ ス サノ ヲノミコト マヲレタマハク レカラバ
請天照大御神而。將罷焉白給
マヲレ アマテラス オホ ミ カミニ マカラムト マヲレタマヘ

則伊邪那岐命勅許出因乃參
ノボリマシテアメニキ
上天矣。

不治而ハ師云斯良佐受氐と訓ばし。上の天照大御神の知看高天原てふ言を承て云処おれぞおア。○八拳須師云夜都迦比牙と訓ばし。八拳は意は十拳劔の下ふ既ふ云ゆ。おホ八束穂おども云ア何きも必ハふ限るふ非ず彌束ふて。あゞ長ア由おゆ。須は鬚の本字ふて。說文ふ面毛也と注せア。漢書注ふは。在頤曰須。在頰曰髯おあア。○今云和名抄ふ。髭口上鬚也。加美豆比介。鬚髯下毛也。之毛豆比介と見えされど。かく上と下とを別て云は。後のおとりて。古は上下きもふ。

あゞふ比牙と云ひゝむ。或人比介は鰭毛は意と云ア。然も有むろ。まさ秀毛ふても有べし。○心前ハ師云牟那佐伎を訓べし。今世ふも云ことおア。牟那佐加と訓は非おゆ。○至ハ師云伊多流麻傳と訓む。但尋常ふ。此字を如此訓とは。少ろ言の意異ふて此は及至の意ふて。伊多流は心前ふ至る外ア。麻傳は成長坐て。如此る頃までと云古きおア。垂仁卷ふ。本牟智別御子を問と云ゆ。此あゞ齡の長しく外きる我云古語おア。凡ていと上代の語は。如此其と云く。其狀を寛舒ふ云ていきも雅やゝおるもはおア。然るを勇悍之異相を云ふど注せ依て古を知ぬ後世心の妄言おゆ。○哭伊佐智恚矣哭伊佐知は師云谷川氏說ふ猶言足摩而

泣也。小兒忿泣時有此狀と云ひさも有むか。小兒の足をばたりて行ふを。伊佐留と云も。此伊佐と本同じ言ふや。上ふ匍匐哭之とのる狀も似たひさ。然むかの泣沢女も。啼伊佐波女も意ふや。万葉五ふ。立をぢひ足ぢひちきび伏仰ぎむ祢うちなげきあどもひの。下ふ味鉏高日子根神の。昼夜哭坐しおとの有を。合せ見るべし。○青山ハ。師云。木草も茂りて。青くと見ゆる山を云て。沼河比賣の歌ふ。阿遠夜麻とのる歌始め。古書ふ多く見ゆ。○枯山ハ。師云。岾字の意ふて。木草の無き山を云ふるぢし。凡て物の無くて。空きを迦良と云。そも意ふひはと字ふ依て云む。本有し木草も皆枯て。無くふひさる山ろ。冬枯のころも山を云りとも聞え。まさもべ。ても木も。枯ふゞら植る山も。有べくも有らぢ。ち

て迦流くも。水の涸。聲も嗄。ふども。乾る意ふて。草木の枯るも。潤沢もふく。れるふれば。同意ふゆ。まさ物も無。紀字迦良と云も。此意ふひ轉さるふやひらむ。もし然らば。初の義も。いひも て行けば。一ッ。ち落。枯を。迦良と云。仁德天皇朝ふ。船名枯野。哥ふ加良怒とあり。ふどひの。ひ古言ふひ。皇極紀。鞍作得志が奇術を云る中ふ。或使枯山。変為青山と云ふこゝひり。○河海も。宇美加波と訓む。古言の格形ひ。抑此神の泣給ふよ因て。山海河の枯乾るハ。如何ふる理ふりひらむ。師の言れる説もあれど。いのふぞやおゞも。多神性ふ然ふ有るぢし。○勇悍安忍而。世記ふ。一書曰。惡神伊不加理豆人民多亡。火氣發起而。天下不安。と云言ひの。同言ふ。俗ふ人をイビ

ルと云て是ゝ。○人草多夭折矣。本ゝ人民とある事を古記ゝ依て人草と作ゝ。夭折て曾許那波延と訓べし。延ハ祇ゝ記ゝあるゝと上ゝ云ゝり。ちて此神の如此有て。御母の坐ゝ国ゝ。罷らむと思ゝして有ゝるゝこと。下の御答ゝ。御言ゝ見え多ゝ。師云。例の漢籍ゝまゝ多ゝる徒ゝ。此神を金性ゝ神ゝありゝと云ゝ。ゝ。其金気ゝ。青山変枯山と云て。いと悪きもの。且て可笑し。若然らゝ金生水べきゝ。海河を泣乾さ乃ゝふゝ。如何ゝ云。まし。○何由哉。哉字本ゝ以ゝと訓ゝるゝ。今ゝ。那爾登可毋と訓ゝ。師の訓ゝ依て改めゝ。父母をバ。加叙伊呂波と云ゝ。○毋ハ。波くゝ訓べし。師説ゝ心得て。古書ゝ。古称ゝ。皆然訓ゝるゝハ如何ゝ。ゝ。ゝ。

国今此云根国其実同耳とも堅洲国も片隅国の意
根国私記曰謂黄泉也とも所り。まと
ふ。其も横東西南北ふと。の隅ふいはらで縦上下の片隅ふて。下
底の方を云外也。書紀は極遠之根国と有も下へ遠き
を云ふ帯中日子天皇を汝者向一道
と神の詔へるも片隅
牙往けと云むが如し。さて隅を須と云る例も。下第百十六段
ふ。所謂天日隅宮を出雲風土記ふ天日栖宮と所也。栖字古書姓氏録は
る必須と訓る例あり。はと天之御巣と云へるも日隅を通牙ゆ。
吾田片隅命と云を旧事紀ふ。ちて此根国と云も。即豫母都
ふ阿田賀田須命と所也。佐
国のふを外ゆ。下ふ須佐之男命所坐根堅洲国とあ也。○欲罷師説ふ凡て麻
加流とも貴所より也退去るを云。故ふ去所を守み。趣方を
葉十八ふ京より越中へ下れる法とを。越
中ふ末可利天とを免ゆ。此意ふ符へゆ。参は貴所牙向

行を云。ふ出る方を卑免て。趣所を守む時ふ言ふり。と反對ふり。故中古まで
は此辨を知て用牙る歟。中昔の物語文ふどふ罷出と云
ら祢ど同じ不とれ所ふても其對へる人を守て云詞
ふハ他へ去を罷ると云ひまと副ふて京へ行を罷ると
云るふど對へる人を守みて語る詞ふゆ。近代ふ至ても混ぬと所也ちてか
く豫母都国ふ罷らむと所欲せる古との由は下ふ云。○
然則も欲罷根之堅洲国を詔牙涙を承て。然も有ばと詔
ふふ也。○此国を也上ふ依し給へる青海原を云て。即此
国土の古とふ也。ふれふても青海原と云も即此国土を
説ていまど安海を云古言ふるこを辨ふべし師
委ら交。○殘傷多馬は上ふ勇悍安忍而人草多夭折
矣と所るを合せて思ふ。須佐之男命の根国ふ罷まく

欲に御爲ふ依てた天神れ御命畏み生造ち〳〵国土を傷ひたとかの愛く所思看に青人草れ天折る〳〵おと哉痛ましく所思してれ御詔ふ已その大忿怒ませるこをい。其生得給へる時た貴子哉得と已と大歡喜して天照大御神ふ高天原此神ふ此国土と依給へるを其御依しの御心ふ背ひて甚く汚穢み惡み所思看に根之堅洲国ふ住まく欲し泣給ふ依てれ已此たうばふる大御忿ふぞ有れる。然るを三大考ふ須佐之男命の欲罷根之堅洲国故哭と詔へる欲罷を論ひて此れ母国ふ罷らむことを願欲し給ふ如く聞も失れど然ら爰欲字ハ將の意ふて罷らむとにと云るふて穢き夜見国ふ罷らむことれ哀さふ愁哭給ふ由ふりと云已しれ考の及ざる外もし此説の如くふらむふハ伊邪那岐命れ御忿ませるをバ如何とり云む強て此をも其依し給ふる国を罷らむ事を哀み給へるを忿給へ已とも云ばれど其御詔ふ然則汝者不可住此国と詔ふる然則まさ任情とのるれどをむ如何とも解ふし難きおとふるをや猶徵ふ云るを見べし然た有れぞ畏み慎み熟ふ事狀を深く思ふバ速須佐之男命の根国ふ罷まく所欲ち〳〵事ハ幽き謂の有おとも也ゆ其は上ふ須佐之男命の御言ふ伊邪那美命を母を詔へる事より先をく心得べし抑天照大御神須佐之男命ふどた上ふも云る如く伊邪那岐命の御禊し給ひてこそ生坐れ伊邪那美命の生坐る神等ふも非ぬを母と申給ふ由た始ふ天都神とちれ二柱の神ふ国生固むばき產靈の業を依し給へるを二柱神それ御

依を承賜ハり坐ては。既ふそれ御德と。產靈神さちふ異
ふること無ハれど。二柱神の御間ふ成る御業ども。一ト
ヒあヒ事蹟をのみ見てハ。此と伊邪那岐命ふ係ヒ。彼と
伊邪那美命ふ係れヒと見ゆる。物うら。悉くおの二柱神
と承賜ハヒ坐る。產靈と神業の御間ふ成ること故ふ。實
ふと彼此の隔おく。男神と御業は女神よも係ヒ。女神の
御業は。男神ふも係る事おヒ。そは風神まさ塞神さちまと此御禊の時ふ成坐る神
十二柱おどと。男神ふのみ係りて。女神ふと更ふ由おき
ゞ如く覚ゆれど。女神よも御子あり。まさ火神。金神。水神。
土神おゞは。女神よのみ係りて。男神よハ更ふ由おき
ゞ如くれまど。男神よも御子れることと云も更ふり。其
と親ゑ子ふ御靈の。互ふ通ふ御間をヒ。成坐る事ふれど

おヒ。然と有れど。其本を云と。兄と。二柱の產靈。大神の。產
靈と御靈を給へる故ふ。彼二柱神と御德御業と等うる
ふ外む有ハ。其と產靈。大神とも。女男二柱よハ坐ま
せども。夫婦の道を為さ乃ふふと非ざる
を。天地をむじめ。產靈と御間ふ成おる万事。まさ唯ふ產
靈の御間ふ生坐して。御身をり生出さま子ふ非ぬ神
さちをも。或と高魂神の御子と申し。或と神魂神の
御子と申て。彼此と隔おく申さもて曉るべし。まさ
此ふ就ておを按ふ。親はもと。產靈と同言おゆべく所思
ゆ。都と須とと。親しく通ふ音ふることを。
次を主基をいふゑぐひいと多ヒヒ。其と朋友ふまれ。
兄弟ふはれ。夫婦ふまれ。親子ふまれ。君臣ふまれ。睦び親
みて。いとゆる親魂の通ふ中より。物も事も成就ふを。親
魂の通ひ合はでと。事も物も調とざれどおヒ。然れど君臣親子夫

婦兄弟朋友あど。云べて親み睦ぶべき物あることゝ云までもあく。何よりおけても神習ふ法(ノリ)ゐ人の道を忘るべからぬ物ゐざりける。万葉三に王之親魂(ミタマ)まと結も本い相哉云く。十二よ霊合者相宿物ゐ云く。

同言の活用(ハタラ)ゐ依あるばし。むびむびぶ。むびべ。む云バ年。と活用るあゆ。其て拾遺集ゐ。君見ればむ云ぶの神ぞう延免しき拾きあ知人を知よ造(ツク)ゐ心。と詠み。狭衣物語ゐ。ゐかくしも造ゐおき知ゐえさせけむ年云ぶの神さ可恨(ウラ)免しけきば。あど云依て。産霊をむびぶと活(ハタラ)ゐ云るあるを以て知るばし。まさ長清集ゐ。とけやらぬ人の心のおらゐ知ゆ。むびぶの神を恨ミおるゐあ。とも詠ゐ。かゝる状よよ免る哥。後世よむいと多ゐるゞ。それみあ産霊。神のむびを。活ゐし云。あれさゐるよて。俗よも親を結ぶあど云も。皆この心あゐゐし。其て男女の道ゐ。ぎらば。遠く隔さる国ゐ去ら必人どち。逢ふゞまよ〳〵親みて。夫婦

とも爲り。親子とも知り。朋友ともありて。親び合ふあど。云ばて神の結びよ依こゆよて。恨を結ぶてその禮知り。ゐかくて其親魂(ムツクタ)の通ひ結び依状ゆ。おら〳〵按ふゐ。互(カタミ)ゐ視(ミ)交し。聽(キ)交し。言ゐはし。動(レ)交(カハ)し。思ひ交ひ事の入交(アヒ)て。己ゞ身おのゞ心て結ばゐ〳〵あ依こゆ。知を知(シラ)食ひと。いひ。聽(キク)を聞食ひと云て。食(メス)とハやゞて受入依〳〵事あるば以て曉るばし。米須と云ゐ。食字を書こゆも此故あり。ちて魂相(ハ)るどちれ交(ヨバリ)て。その言(フ)ことと動(ナス)おとを。實(ゲニ)もと受入ゐ〳〵。是やゞて心よ結ぶあゆ。まさ心相ざゐる人の。我を惡(アシ)ざはゐ言(ヒ)おし爲(シ)ゐ事て。憎(ニク)くも恨(ウラ)免しくも思ふ。おれも己ゞ身おのゞ心て受入ゆ結ばゐる故ゐ。恨(ミ)ゐ結ぶとも云免ゆ。故よ愛ゐゆし

交をやむるを、親をさおといひ、善らぬ中を直にを、恨をとくといふ。此も共より結ぶより因れる言ある由を思ふし。ちて伊邪那岐、伊邪那美二柱神の成ある万物事どもは。始終ながら産靈神の御徳を承賜て。御心を混一ふ爲て。いそしみ坐る御業あれど。御互ふ親魂も相通ひて。甚濃く親みまし。此時の御禊も。それ御親より事起りきで。天照大御神。須佐之男命まで。共ふ二柱神の御子ある。おと。灼焉もけおめ。此謂も。うひ学の人。まと生さらしらある徒おども。速ふ信ひくまじき事ある。を。熟く思ひ辨ふべき物れ。然るを私記より問。素盞嗚尊非伊弉冉尊之所生。何故欲従母於根国哉。答。昔伊弉諾与伊弉冉為夫婦。素盞嗚尊縱非伊弉冉之所生。猶為伊弉冉之子。因其本約。假云欲従母耳。其実非母也。是明也。是頗難會。文也。と云。るも。此旨をとちて須佐之男命も御性質

とちて。御母の国ふ罷坐まく所欲ちく事は。伊邪那岐命。彼豫母都国も穢き狀を見畏ある万ひて。族離きむと詔ひ。御唾爲て撥ひ坐しは。と御禊し給へる其驗ふ因て。かの濃く親び給ふる御親みの御體ふ受け所知看ちく。ぐ。此時ふ大御身を被ひ竟ぬる驗とて。須佐之男命ハ生坐せ。と知られと。故此神ハ。依給へる此国土を治さで。根之堅洲国ふ坐ば御母ぐ。往坐さむと所欲してぞ哭坐けむ。熟思ふべし。濃く思ふべし。天照大御神も。比賣神を所知看し。須佐之男命の方ふ属坐て。天於日の御国方ふ属坐て。月夜見国を所知看ばことは。妙ありとも妙ある。幽き謂の中ふも。妙ある契ふて。此みれ如此有でハ得有まじれ。妙ある理の具れるおとあるばく。はと二柱

の産霊大御神の神霊ゐ因て。さて然一向ゑ大御母の国あることを言までも非ず。ゐ罷坐まく所欲し給へども。岩屋戸の御荒びゑ後ゐ解除竟ゑ万ひてゑ。然ゑゲゐ。大御父ゑ大神ゑ。御依坐る御言を畏み給ひて。所欲ゑ隨ゑハ罷坐さば。久しく此国土ゐ坐て太じゑ御功ども立給ひ。さて終ゐは理の如く。根国ゐ入坐て。月夜見神ゑゑ給ひしゐ。ゐゐ次くゑ云ふを見る

○白日は。伊邪那岐命ゐ請奏給ゐ。故書紀ゑハ請曰とゐり。○然し。則ハ。伊邪那岐命の。任情所知夜之食国と許容し給へる御言を承て詔へるゐ。○請天照大御神而將罷焉。請ハ麻袁志と訓べし。雄畧天皇紀ゐどゐ。ゐ然訓る例ゐ。ゐてかく請給ふは。永く夜見国ゐ罷給ふ故ゐ。大御神ゐ御暇請し給むとのゐとゐ。御兄を敬ひ慕ひ給ふ理。信ゑ然も有ばく。有が為き御心ゑゐそ。○勅許之その請給ふことゑ。然有べき理ゐるゐ因てゐるばし。○参上天矣此ゐま於如此云おきて。下ゑ其昇給ふ事を細ゐ云て。文法ゐ。上の禊祓の処ゑも此格ゑ文ゐ。ゐて参上を。麻韋能煩理坐と訓ことは。師説ゐ。仁徳天皇巻の。大御歌ゐ。麻韋久禮。参來ゐり。万葉十八ゑ。麻爲泥許之。参出來ゐ。ゐど有例ゑ依れ。然るを韋を宇と云成て。参上を麻宇傳ゐど云るハ。後の音便ゑ轉れる言ゑ。麻宇能煩留。参來を麻宇久。参出今ゑ至るまで。正しく云ふて。ゐく参入のみゐり。万葉六ゐ。参昇八十氏人の。云くと。ゐり。

於是伊邪那岐大御神者。神功既畢而。昇坐天報命白給而。仍留宅日出少宮。又坐淡海出多賀。亦坐淡路洲。此大御神。爲通行天而。梯作立給矣。此云天梯立。大神出御寢出間。仆伏矣。仍怪久志備坐矣。乃在丹波國。久志備出濱是也。

神功既畢而とは。天神の御言はゝ〳〵。國生み固め。青人草を生坐し。諸〻神〻を生給ひ。生終ふ。二柱の貴子を生得給ひて。其神〻の某〻ふ功を持分ち免給ふまで殘約て云るおゞ。○報命白給而ハ。天神ふ外ゞ。其ゝ始め

天神の御言を承給ハヒ坐て勤しみ給へる御業あり
らばあヒ。○仍留宅日之少宮日之少宮とは。天ふ在る宮
を云て名義ハ。天照大御神の大宮ゝ有ふ對へて。其永ふ
寂然ふ。隱坐まゝ宮ふるを以て。少とは申ゝあるゝ。然
を私記ふ。日之少宮、是東北之地云くと云るを始めくさ
ぐさ云る説どもゝあきど非ふり。師云。日之少宮ゝ天上ふ
るゝと。仍留二字ふ仍留宅とは。此時天上ふ登給へるは
て著きものなや。
まふて。此国土ふ復降ヒ給ふこゝ無く。留宅ヒとふヒ。祝
詞文ふ。高天原爾神留坐。とゝあるも此意ふり。是ふ就てふ
邪那岐大神ハ。御頭王をさ冠ふ。大日霎命ふ賜ひて。天上
を知し免給ひ。已命も天ふ神留坐し。伊邪那美大神ゝ豫
母都国ふ鎮坐して。月夜見命の其国を所知看ゝこと。や
ゞて伊邪那岐。伊邪那美二柱大神ゝ御功徳を。日神月神

の受継給ひ。其御子命の。此国土の大
君と坐ゝ事。悉ふ深謂ある事ふる哉。○坐淡海之多賀淡
海は。師云。息長帶比賣命段の歌ふ。阿布美とゝあヒ。和名抄ふ近江
知加津阿ふ美とあるは。遠江ふ對へて。後ゝ云る名ふし
て。古も今も。常ふゝ近江と書ても。多く阿布美と云ふり。
さて此ゝ湖ゝある故の名ふして。即阿波宇美の切まヒと
ゝふふヒ。淡海とは。淳ふら熟淡しき海を云ふヒ。さて其ゝ
湖の名ふれゝ。其国をハ。淡海国とゝ云べけまと。
淡海とれみ云てゝ。国名ふゝ非るゞ如くふれども。本を
以てやゞて末の名ふゝるこゝも。常ふ例多きふゝ。
ゞ有ヒ。ちて多賀ゝ。神名式ふ。近江国犬上郡。多何神社二
座。と見ゆ是ふるゝし。和名抄ふ。田可郷ふり。まさ永万記
て此一座ゝ。伊邪那美命ふるべし。其ゝ伊勢の伊弉諾宮ち
の一座は。伊邪那美命ゝ坐るを以て。然ハ思ゝ。扨ふり。
俗ふ。伊勢へ七度。熊野へ三度。愛宕様へは月参り。と云ふ
諺ゝあるを。此国ふてゝ。御多賀様へゝ月参ヒ。ゞ云由ふ

て、伊勢、大御神宮と、此御社とは詣でぬ人おし、と国人云り、然も有べきことぞ。けて此御社ふ
竝びて日向、神社。大和、国城上、郡、坐日向、神社あり。三代実録、仁和元年
の処より、近江、国犬上、郡、少初位下、神人氏岳と云人ありて、
姓氏録より、神人、大国主、命五世、孫、大田々根古、命之後也、と
有、れ由あ
りげふ。都恵、神社ゐの。此、御社も、彦根、東四五町ばかり
山、腰より在て、千代、社と云ぞ。
日向、神も。日向ふて御禊し給へるふ由あ。都恵、神も。彼、
投棄給へる御杖より由あ。後、人をく考へてよ。○坐ハ。師
云。麻志麻須と訓ぜし。凡て此言。上の麻志も。坐、字ふゐと
。居給ふこを。下も麻須も。附て云ふ崇辭より。給、
と云ふぐひれ。さて麻須と、多麻布とも、似る崇辭ふ
び。中古より。も。坐を云と。をさ〳〵止て給、れと。其事より、従て差別あり。相混べからず。
と云ふり。さまど古書の訓を附るより。必ふの差別を辨

ふべし。其も古事記、まと古き宣命祝詞ふど。○亦坐淡路
を見て、定まれる例を考へ知るべきれ。
洲。神名式ふ。淡路、国津名、郡。淡路伊邪奈伎、神社。名神大。ゐゐの
る是ふ。清和天皇、紀。貞観元年正月。授淡路、国無位勲八
等。伊佐奈伎、命一品、とゐ。さて此御社も、国の一、宮より。
履中天皇、巻五年の処ふ、此神の、飼部等ゞ黥、今郡家村ふ在、と帳考ふ云り。
の皿、を惡まして、祝より御託し坐る事あり。さて師説ふ
伊邪那岐、大神の現御身ハ。終ふ天上ふる日、少宮ふ留坐
まして。淡路と多賀とは。其御霊の鎮坐、御社ふり。然るを
坐、于多賀。坐、淡路洲、を云へるも。警バ天照大御神も長ふ天
上ふ坐ませども。伊勢、伊須受、宮坐と常ふ申し。まと手力
男、神者、坐、佐那縣、とも。大山咋、神を。此、神者坐、近、淡海、国之

日枝山亦坐葛野之松尾ともいふる類の例ふて皆其神を拜祭る御社をかく云へる古の格あり。凡て神の御事を云傳へさるふ其現身と御霊との差別ありるを。とゞ同じさまふ云傳へさるも れある故ふ後世ふ至りては此差別をあらで皆人の疑ふこゝを多し心得おくべきあとあめ。ゝを云れき。猶此外も此大神の坐まに御社に大和国添下郡伊射奈岐神社大月次新嘗清和天皇紀。貞觀元年正月伊弉奈岐神從五位上と見ゆ。葛下郡伊射奈岐神社。此御社に今下牧村と云ふ在て五社と称し。その古宮址に忍山の東ふ在と帳考ふ云り。城上郡伊射奈岐神社。此御社は在所詳ならず。或い柳本村三輪社是あり。と云と帳考ふ云ゆ。攝津国嶋下郡伊射奈岐神社二座。並大月次新嘗清和天皇紀ふ。貞觀元年正月從五位上と見ゆ。此御社一座に山田庄小川邑と云ふ在て今五社

と称し。一座に佐井寺村と云ふ在て今春日と称ゆ。ゆ帳考ふ云り。ちて此一座も伊邪那美命あるべし。若狭国大飯郡伊射奈伎神社。この御社に上ふ並て同郡ふ青海神社あり。此に須佐之男命ふ所知青海原と依し給へる謂ふ依て祭れるふて彼神あどふに非るふや。出雲国出雲郡神伊佐那伎神社伊勢国度會郡伊佐奈岐宮二座。伊佐奈弥命一座並大月次新嘗あど神名式ふ載きゆ。あわ式ふ載さる御社国くふ聞ゆ。ちて此伊勢国ある伊佐奈岐宮に世記ふも伊佐奈岐社二座伊弉諾尊。左方霊御形鏡座伊弉冉尊右方霊御形鏡座。伊佐奈岐と書るに古の書格ある。伊弉諾伊弉冉あど書るに後人書紀ふ依て書改ゆ。ゆ故わ。さるハ此記ふ伊佐奈岐社とあるは未宮と称さ。此事ハ別ふ世記考ふ云ゆ。と有て神名祕書云延暦儀式雖不載神形撿神宮神祇本記御鏡坐也光仁天皇寶龜

三年入於官社仁壽三年八月二十八日依洪水神殿流損同年十月一日任宮司伊度人注申造進神殿齊衡二年九月廿日奉遷神體伊弉諾神與伊弉冉神又月夜見命與同荒魂命正體洪水之時各御同座之間奉任神慮奉鎮于同殿也貞觀九年八月戊辰勅伊勢國伊佐奈岐伊佐奈彌神改社稱宮預月次祭并置內人員此事國史より見えとゆ同十年增作寶殿寸法者也但伊弉冉社無增作伊弉諾爭同殿御座也月夜見之荒魂命社亦無造作如本月夜見命同殿御座也並今号小殿是也凡月読伊弉諾貞觀以來黒木櫟同九本板敷御座也十六段月夜見宮の処ふ注ると合せ考ばし佐奈岐宮二座去大神宮北三里內人二人物忌父各一人と見えて今宇治鄉中村と云ふ在りとぞ即月夜見宮の地內ふり神名祕書世記ふ伊佐奈岐宮を月読宮より上と為とるゝ今は月読宮を以て諸祭の次第も內人の列も皆此宮の上とし且宮中の例東を以て上とし然るに一院の內月読宮は西ふ在り是ふ出て現るとき世記は偶載る処の次序を失れるかるし且宮制今月読宮東西一丈八尺四寸南北一丈二尺二寸伊佐奈岐宮は東西一丈四尺南北一丈ふり殿の大小も自觀るべしと云るは然も有べく聞めれども神名式ふも伊佐奈岐宮ハ月読宮の上ふ載らきとき此は上古よりの次序ふて世記は誤れ非ず但し伊佐奈岐宮をハ月読宮の大ふ由あとは謬れれど此は宝亀三年八月崇を為し給へる時よ已宮号を奉らき神馬を奉らゆゝと始已伊佐奈岐社も此時よ已宮と称せるふどを思ふふ別ふ月読宮を崇ふ給ふべき謂の有りて外るべし

○天梯立梯立は高きふ昇らむ料ふ構立る梯ふて今俗

ふ階子と云物も。即是よりて出さる名ふて。其れ垂仁天皇
卷八十七年の処。ふ。石上神社ふ仕奉られある。五十瓊敷命の。其
妹大中比賣命ふ。其職をもおて給ふ時よ。大中比賣命れ
辭て。吾者手弱女也何能登于天神之庫と白し給へて。し
のば。五十瓊敷命。神庫雖高造梯則不登乎を言ふるおと
有て。故諺曰神之神庫隨梯樹此其縁也。と云るを以て。梯
立やゞて。今世ふ有る階子と云物の狀ふ。高れよ昇る料
ふ作れる物ふるおを我辨べし。然れど此ある天梯立れ。
天磐船ふ乘て。天磐船れ。天浮橋と云と同物れる事。第百三十七段よ委く云ふべし。天上ふ
昇給ふ時の船居ふ。作給へるふぞ有ゝ侭。其れ神さちの。磐船ふ乘て。天

降坐ゝ事。実を熟考ふるふ。みふ高山れ頂上ふるれ。そ
の降坐ゝよ。便をきふ依てふらむと思ひ合さ侭れバふ
め。然きど此梯立を造給へるは。いまざ高山の生出ざる
間よぞ有ゝむ。其れ高山の本よて有らむふハ。梯立を作
て給ふべくも有ら祢ざふて。かくて天上をり降るふ其降口ふも。梯
立れ有しれめ。其れ下第百四十三段。ふ舉さる。天二登命の。天上
ふ參上て。歸降ませる時の言よ。大橋れ皇大神。並ふ皇
御孫命の天降坐侭を畏みて。後方れ小橋を。て參上れて。
と白給ふるおを有きバふて。おの大橋小橋と云るハ。
天よ有らむこと我何ぞや思ふべゝきど。此れ船即天ふる橋立ふり。其れ
居ふれど。天よも国土よも。必有ばき理よこそ。扨上第二
十九段。ふ。天照大御神を。天之御柱以て。天上ふ舉奉さるへ
て。と有る天之御柱れ。彼處よ注せる師説も有きど。此ふ

る梯立と同物ゐて。天浮橋ゑ乘せ奉ㄗ。梯立を船居とし
て。天上ゐ舉給ゑめとの事ゐぞ有べき。但し彼も柱ゑ云ひ。此も梯と云る
ゑ疑有べゝれど。此も本同言ゑて。共ゐ波志と
言ゞ本あきむ。同物あらむと云。考ゑ害あし。然れど大
御神を。天上ゐ舉給へる處の。天之御柱も。始ゐ淤能碁呂
嶋ゐ見立給へる。天之御柱と。名も同くゑて。別物ゑぞ有
ける。然れども。名の本ハ一ッゐ
るゑゑ。上ゑ言るゞ如し。○怪久志備坐矣。久志備も
奇異ゐて。仆るゆゑく作給へゐ梯立の。仆伏とるゐ。奇異
のおもひを。れし給へゐ由ゐㄗ。扨ゑれ久志備てふ言を。
今は體言ゐゑゑてのみ言ゑども。此ゑ久志備坐と有れ
む。本は用言ゑて。久志夫流と活く言ゐゆ。故日向

の高千穗峯を。槵日二上峯とも。高千穗槵觸之峯とも云の
ㄗ。槵も共ゑ借字ゑて。靈異ゐゆ。日觸ハ活用ゝる辞れゆ。○久志備濱。名義伊邪那岐
命の。彼梯立れ仆伏とゐを。怪み奇異び給へゐを以て。負
る名ゐゆ。ちて本書丹後國風土記ゐ。與謝郡郡家東北隅方有速
石里。此里之海有長大石前。長二千二百九九丈。廣或所九
丈以下。或所十丈以上。九丈以下。先名天梯立後名久志濱
云ゝ。この畧ける文。即本文ゐ舉ゑる傳。こゝゐあり。此中間云久志。自此東海云與
謝海西海云阿蘇海。是二面海雜魚具住。但蛤壬少とゐㄗ。
〔天江山いくめゝ〕道の遠けれど。まゞふゑも見ば。ちて天
天のむしゞㄗ。此外ゑも哥ゑ詠とる多く見も。
ゐ通坐むゆして。作立給ゑる階ゐきむ。高く立て有し城。

神の御寢坐る間ふ。仆れ横さはめて。丹後國の海ふ遺れ
るふ。また播磨風土記ふ。賀古郡益気里ニ有リ石橋。傳云。上
古之時此橋至天。八十人衆上下往來。故曰八十橋。
とあるは。是も天ふ往來ふ一の橋立と見も。さるよりても此
傳ふ。此橋至天云々と云て。天ふ連る趣ふ言るは。傳の誤
ふるべし。其は第五段ふ注る如く。天は本より動き旋ら
ば。國土は本より旋り動れる物ふゆしらば。連べくもあ
ら。且浮橋も。旋ふる物とおもはれ。信友云。國人の物
語ふ。此石橋の中間ふ社あり。女男二柱神を祭る。土人
は愛宕と云と云り。夫木集ふ。大納言顕朝。雪あれ
ば天の羽衣白と矛ふ風さえ。とる八十の岩橋。此を天
浮橋と。一物ふ思ハきし師。說は。未委のらざ。し形。天梯

於是健速須佐出男命。參上天

立の町數二千二百二十九丈。ふの間數三千七百
十五間。町ふ直して六十一町と五十五間ふ。

出時。山川悉動。國土皆震。此者
神性出雄健而使然也。爾天照
大御神聞驚而。我那勢命出上
來由者。必不善心。欲奪我國耳。
吾雖手弱女。何當避乎詔而。卽

解御髮纏御髻而縛御裳而爲
袴於左右出御美豆羅亦於御
鬘亦於左右出御手各纏持八
尺勾璁出五百津出美須麻流
出珠而於曾毘良者負千入出
靫於比良者附五百入出靫臂
者取佩伊都出高鞆而弓腹振
立劒出手上急握而堅庭者於
向股蹈那豆美如沫雪蹶散而
伊都出男健蹈健發稜威出嘖

讓而。御親迎而。待問出。何故上來耶問給矣。爾速須佐出男命答白。吾者無邪心。唯大御神出命以而。問給吾出哭伊佐知流事出故。白都良久。吾欲往母国

而哭也白出則。大御神。然則汝者。勿住此国焉詔而。夜良比給出故。以爲請將罷往出狀而也。跨渉雲霧而。參上耳。不意姉命出翻起嚴顔矣。吾無異心也白

給則。天照大御神。詔然則汝心出清明事者。何以將知矣。於是速須佐出男命白曰。各宇氣比而。於其誓出間。當生子也白給矣。

山川と。師云山と川とをゆ。山の川ゆ加を清て讀べし。○動と。師云。登余美を訓べし。万葉六ゆ例あり。まさ七ゆ大海の水底豊三立浪之十一ゆ居名山響み行水のあどあり。まさと同六巻ゆ。山も動響ゆ左男鹿は。妻呼び響ゆ。獣ども見え。動くを登く呂と訓る處あども。ものきば。動むとを。ぐろ。比ぐくさとあり。猶この言下八千弟神の御哥ゆ見ゆ。其処ゆも云べし。○国土と。山川ゆ對へて云れど。二ゆと非ゆ。多ぐ地を云ゆ。久邇都知と訓ばし。此二字を久迩と訓べき処あれど。ち〜と久迩都知を訓むぞ宜む。下ゆ天沼琴拂樹而地動響矣。ともの。第八十六段。○震師云震と。書紀ゆ地震と見えされ。布流とも訓べれきど。武烈巻歌ゆ。斯多杼余美那韋賀余理許婆。下動地震。來者あり。とものきば。由

流ぞ猶古言あらむ。（余と由とを通、例！ おゐおわし。）今言ふも然言あり。○神性を。加年佐賀と訓べし。神を尊辭よて。神功の神ふ同じ。佐賀ハ師説ふ。性を佐賀と云は古語ふて。後歌よ憂世之佐賀あど云も。是よとく叶へり。其を元より自然ふ。然有ふ事を云言ゆり。（今云。下よ使レ然ラ也と終よさるを思ふべし。）佐賀那伎を。其反ふて。自然然有べきちまふ。背ゆ違ふるを云ひて。是も古語と見も。後の物語よ。言多くて人を惡く云ふゆをちゞゆし事云を。用樣ゆ移れるゆりと云ふ。（ふを夢の祥ふあど凡て佐賀と云ひ。佐賀那志を云言ゆ。後世よ心得誤れるふ事ゞもを。委く辨へられさるを。今を其を遺して挙ゆ。記傳四、卷披見べし。）ちて此神の御稜威の太じゆことと。此文よて

想像ゆ奉られとり。○聞驚而ハ。師云。伎く、淤杼呂迦志氐と訓ばし。（伎を延て迦志と云ゆ。例の古言ゆ一格あり。人を令レ驚意とハ異ふあり。）此言古事記ふ處〻よ見も。見驚とも。まと聞喜見喜ゆども。ゆりと皆古語ふり。○我那勢命ハ。上（第十一段。）ふ見も。ふを書紀よ。吾弟と書れとるゆ。漢文よ依れる。○善心ゆ。師云。宇流波斯伎心と訓べし。此を書紀ふあり。（神代下卷。）ふ友善とゆる。（古事記よゆ愛友とゆり。）善字ゆ意よて。（漢籍よても。かくさまの善字ゆ。古、より人の交ゆ睦まふて。異心ふきを云、ウルハシと訓り。）ゆり。○欲奪我国耳ゆ。師云。我国衰奪牟登欲須爾許曾と訓ばし。（耳字を許曾よゆて〻訓む由ゆ。記傳首、卷よ云り。）ちて我国とは。高天原を詔ふふり。（其由上よ見も。）奪は万葉五ふ。有婆比氐てふ言見えとり。

ちて例を引き畏けきど。神武巻に。長髓毘古聞之曰夫天神子等之所以來者。必將奪我国云〳〵。とある語の様よく似と。○御髪ハ。師云。美加美と訓べし。古書にみあ。美久志と訓を附さゆ。中古の書にも。おかむぐしを云。今もおぐしを云。されど此も。櫛より轉れる後の称なるべし。此事上にも論ひおきぬ。ちて上代の女は髪ゆ様も。縣居大人説ふ。凡て古への女は髪の狀も。幼きかどには。目ぢしをも云て。額は髪は目をさえばこの上生下れ。そを過て。肩邊に下るかぞふ末ゆ切りて。放てゐるを。放髪とも。童放とも。うなゐ兒とも云。八歳子と成ては。切らで長らしむ。其は十四五歳とかて。男をはまでも垂てのみゐきば。猶童放とも。

わらはをも云。其も万葉十三に。歳は八年を斬髪の我のと我過ぎ。九に。嵬名負處女は八年兒の。片生は時も小放に。髪多久までに云〳〵。かど有を見て辨べし。ちて男して後に。髪擧ゆるかをも。二巻に三方沙彌は。園臣生羽は女を妻と爲て。幾時も經ずして。病臥しを。見る歌に。多氣婆奴禮。あぶらづき。炙て。多き髪も。さがぬれむ〳〵と。延垂るものかるを云。多は。長き妹は髪。かの比見ぬ。に搔入れらむ。後の物語書に。ことも。かくて。聟取ハ。ゐの。此も男の。女は家に行て住めば。あり。此哥を思ふに。いと古へも。ちろぞ有。れらむ。哥意も此比。病て。妻の許に行て見ぬ間に。いの〳〵髪あげしれらむ。に。挙ゆるさ。ゐれ。ゐらし。き。と云意かるべし。ちて童ざまふ垂さりし髪を。挙をさむるを。かき入ると云べし。十六巻に。橘の寺は長屋に。吾率宿し。童女はかりハ髪上れら

むらとを免るも、とを免るゝ。生羽ゞ女の答歌ゝ。「入皆は
此哥ゝ同意あり。
今ハ長しとゐぎゝ言ゞど。今ハ髪いと長くて、あぐばき
ほどゝも有れど、ゐゞ祢をと
言ゞど君ゞ見し髪亂れゐゞゝゝ。君ゝ見え初ゝさまを、
あゞ。伊勢物語ゝ。「くらばあし振分髪も肩過ぬ、君ゝらばゝし
誰ゝあぐばき」と賦るも此類ゝり。さて上ゝ云る如く、十
五六歳の比まで、髪を垂てあるを、此年比ゝた、髪いと
長く成ぬる故ゝ、笄ゝて頂へ挙、結ゝ、髪あげと云ゞめ。
ゞ。ゞゝる歳以て辨べし。今云、此、縣居、大人、説た、記傳ゝ挙ら
れざるを、万葉考と別記を合せて、
私ゝ挙ゝ
るゝあゞ。と言れとゐゞ如し。然るゝ今ゝ〳〵ゝ解と有を。
書紀ゝた結髪ゞゝゝる。解と結ゞ大違へるゝ似とゞ。故猶
考るゝ。まゝ凡て女た年長て髪あゞゝた。上代よゆ儀
ゝゝゝ。天武紀十一年ゝ詔ゝ。自今以後男女悉結髪とゝゝ

るを思ふゝ。上代ゝ結と云しは、本を一ゝあゝ免挙て結
て、其末ハ後ゝ垂とゞゝむを、彼詔ゝ結ゞゝるゝは、頭上ゝ
結縮て髻と成を云ゝるゝ。髻とた、一ゝゝ縮とるを云ゝ
美豆良とハ異ゝり。さて同十三年ゝた、ゆゝゝの男ゝ二ゝゝ分けとる。
任意也。とゝゞて、ゝゝ十五年ゝ詔ゝ、婦女垂髪于背、猶如
故とあるゝ。又ゝゝ上代よゞの風ゝ如くせとゝゝゞ。故
ゝの十五年ゝ詔、以後の万葉ゝ哥ゝも、髪ゝゝぐる事を多
く詠るゝ。かの本を結ことゝて、末ゝ垂ゝれど、彼詔ゝ違
ふことゝ無し。○今云、ゝゝ縣居、大人、説ゝ、彼、天武天皇紀十
五年の詔ゝ後ゝ、文武天皇紀、慶雲二年の詔
ゝ、令天下婦女自非神部斎宮人及老嫗皆結髪とあれど、
其後ゝ去ばて挙ゝらむと思ふゝ、物語書らゝた、もはら

垂とる様を書さゆ。唯、続古事談ゐ。高内侍云く。圓融院の御時。典侍辞しれきども。ゆるされざりれむ。内侍所ゐ。屏風をとて〳〵さむらひて。申にこと有る時ハ。髪を挙て。女官城多く具して。石灰壇よぞ候れ。るとゐる。慶雲二年の詔れ後ゐ。まさ垂髪の御制あらバ。かく有らむや。後までも挙るを正とせしゐと知べし。ちてうゐ物語紀伊国吹上巻ゐ。女ハ髪あげて。唐衣著てむ。御前ゐ出げと云ひ。国ゆ物ゐ。皆髪ゐ上げと見えさり。かくて其挙る形む。内宴の様書さる古。繪ゐ。舞妓の髪あげさのふる形御食参らに采女ゲ。髪あゲさる額ゐ様。うゐぢのさふくらと。ゐど。大うさむ等くて。舞妓ゐ宝髻をし。采女ゐ蔽髪比せ。ゐ。且和名抄ゐ。假髪須恵以假覆髪上也と云。蔽髪比せ多飛蔽髪前也と云ゆ。雅亮ゲ五節の事書るゐ。おきびさひ。ゐ云るも是ゐ。かゐ舞妓のひゐとひの厚さく中高きと。采女ゲ額のいと高うらぬゐ。此二ゐ分ちあるべし。凡ハ紫式部日記ゐ。髪あげさる女房ゐ事をかちらの繪ゐきさゆ。とやうゐ書しもて。思ひるもむゐ。ゐ。わをそハゐゲ見むゐ。ゐ玉の吾て万葉十一ゐ。おけてゐぬ。ゐ。ゐ。ゐ

良ふかし給ふを云かぷ。さて是よぷ蹈健と云まで。假
よ丈夫ぬ御裝束を爲給ふれ。但し玉を纏ハ男ふ限る
ふもてらば。此ぬ斧く嚴かる御貌を示しとはむむ料よ。
故ふ美き玉どもを。あらら纏持せるあるべし。○今云玉
を帶る由ぬ。上よ云る如く。本ぬ御魂のあるぬあれバ。此
時かく纏持せるも。言もてもけば。御心ぬ建き御有狀を
てらはし給ふかり。○縛御裳而爲袴。此ぬ裳ハ後牙長く曳く物か
ふを。前へ引上げて。男ぬ褌の如く爲給ふかぷ。○御鬘も。
上第二十段ふ見も。○御手ふ玉を纏ことは。上の御頸珠の處
ふも注しぬ。かか仁德天皇卷ふ。鴟鳥皇女ぬ手玉ぬ。かく
れかき良玉ぬ。ぷしかと見え。万葉三よ。泊瀨越女ゞ手ふ
纏る玉ぬ云く。かど詠ぷ。○各は美那と訓べし。○八尺勾

璁ハ。横井千秋考へふ。八ぬ彌かぷ。尺ぬ佐明かぷ。佐ぬ眞と
通ふ言かぷ。されぬ彌眞明の勾玉と云こをれり。ちぬ勾
玉と云名ぬ。形の曲きるを以て言ふぬ非ぢ。古事記よ勾と書き。書紀
よ曲と書るハ。共ふ例の借字よて。麻賀と云ハ。仲哀卷よ。眼炎之金銀彩色
をかる。眼炎ふて。目赫かるを約ぬて麻賀とは云へる。
眼かゞやくとぬ。物語書ぬどふ。目もあやかりと。ちきば
云。俗言よ。まばゆき。かゞはゆき。かど云よ同じ。
八尺勾玉とハ。彌眞明之目赫玉と云かとふて。玉のぬを
きて明朗ふ。玲瓏ぷ美麗きをしぬ名かり。垂仁卷ふ。鵜鹿
鹿赤石玉と云あり。万葉歌ふ。加我欲布珠かども賦ぷかど
れらを以ても。玉ふ赫と云こをの由かるを知ばし。然るを昔

と也。此意を得さる人おくして。さぐ王の形れ曲りさるよ依れる名どのみ心得來れるハ非ず也。今世ま土中を掘出ずどして。多くのある曲王と云し物ぞと心得て。みざれるを以て。此を上代の曲王と呼ずきども。其今在れ。さしも美き王ま非ず也曲王と云し物れ。其形の少ゝ曲土中ずどより出るゞ多くあれば。古へ多ふ有し物と見えて。殊ま称美ふとみさる物とハ見えば。古への曲王と云して。世ふ希ま有し物ま非ば。とゝひ其形ハ。今ある曲王の如く。多ふ有し物ま也。ずき。其形ま依て。曲王如く。いけゝゝ曲りさ也。と云しふハ非ば。と知べし。形の曲ゆ也云ず法を。師も此と云しふハ非ば。と知べし。形の曲ゆ也云ず法を。師も此さらむれ。何の珍さきまとゝ有む。

考へいと宜し。從ふぼし也言おのれき。猶王ふ。明朗ふ玲瓏也。美麗きとしを云るまとを言れば。高比賣命れ歌ま。玉乃御統御統の。ほの珠映。云ゝとを免る。豐玉毘賣命の御歌ふ。赤玉は緒さ弄光きど白玉の。云ゝとある。神賀詞ふ。

白玉能大御白髮坐。赤玉能御阿加良毘坐。青玉能水江玉乃行相爾。とある れども目炎耀く意の言成ずゆ。ちて仲哀天皇紀ま。如八尺瓊之勾以曲、妙。と云る文れ有ま就て。師も横井氏もくさ〳〵論れさる説の有れど。此れ勾字の下ふ。玉字を脱しさるずゆ。其由れ。彼卷の徵ま云べし。ちて書紀まはいぶ古も八坂瓊と ある也。ずきも意ハ異瑞八坂瓊とも有也。美豆れみぶこづきを云ずう。瑞字まずおむべらば。垂仁天皇卷ふれ。狢の腹ふ。八尺瓊勾玉の有し事も見えと也。ずあ彼処まも注ふを見よ。〇五百津ハ。多ゞ數れ多きを云言ふるずと。上ま云也。津れ一ツ二ツの都ず也。〇美須麻流ハ書紀まれ御統とあり。師云。纂疏ふ以絲貫穿總括也。とある意まて。即須夫流と語通ず也。志婆流。志麻流ずも本同言の轉れる

あるべし。まと谷川氏云。和名抄ハ昴星をはぜるとあるは。彼星の形勢の。此御統ハ似とる故の名あはべし。まさ天門冬をはまろぐさと云も。葉の細ハ似おれるゞ似とれむゞ。竟宴哥ハも。御統をはぜるは玉と詠ゆと云り。

○今云。神名式ハ。伊勢国度會郡棒原神社。とあるの社の祭神を。内宮儀式ハ。称天須婆留女命と云。同郡ハ。江神社と式ハあるを。儀式ハ。称天須婆留女命。兒長口女命云〻。とあり。狭田神社の処ハ。須麻留女神とあり。御鎮座本記ハも。大御神は。丹波国吉佐宮ハ遷幸の処ハ。須麻留賣神。今号須麻留賣社。是也とあり。此も須麻流。須夫流。も。と同言ある證とあるべし。ちて此須婆留女命と云神も。いゝれる神おらむ。考へ得ゞ。ハとし。此も事の因ハおどろゝし置ア。かは高比賣命は歌ハ。玉の美須麻流美須麻流乃云〻。

万葉十ハ。白玉の五百ハ集を解も見ア。十八ハ白玉乃五百ハ集を手ハ結び。おど賦るも同物ア。集と云るも即統の意ア。○纏持持ハ。ゐ佩給ふを云ル。○曾毘良

ゐ下文の比良ハ對へて。背を云ア。故書紀ハ背と書り。ハちて曾も勢は轉れる言ハて。師の云れとる如く背平ア。師云。今せあり。と云ハ。少し異あり。せあり背中の意ハて。和名抄ハ。脊を訓るぞ當きる。○千入。師云。書紀ハは。千箭と書て。此云。知能梨。とあるア。和名抄ハ。箟箭竹名也。和名乃ゑあり。大神宮式。神宝料ハも。箟二千二百五十株と見も。かゝれは千箟入は意ア。五百入も準へて知べし。伊は畧ハ常多し。千を云五百と云は。其量ア。されど必千と五百と入ばきハ非ア。唯多く入由ア。○靫は。盛箭室を字書ハ見も。推古天皇紀ハ。靫此云由。岐和名抄も同じ。皇美麻命の御天降段ハ。天石靫と云も見え。孝徳天皇紀ハ。金靫も見えとア。大神宮式。神寶中ハ。姫靫二

十四枚。長各二尺四寸。上廣六寸。下廣四寸五分。矢刺口方二寸九分。以檜作之。以錦黏表。以緋帛著裏。著緋四処。並用紫革。長各二尺。廣一寸三分。箭四百八十隻。以烏羽作之。蒲鞆二十枚。長各二尺。上廣四寸五分。下廣四寸。以檜作之。編蒲著表。以鹿皮著頂。以丹画裏。著緋四処。並用紫革。長各二尺。廣一寸。箭一千隻。以烏羽作之。革鞆二十四枚。長各一尺八寸。上廣四寸五分。下廣三寸八分。以調布黏之。塗黒漆。著緋四処。並用紫革。長各二尺。廣一寸。箭七百六十八隻。以鷲羽作之。と有り。此れ

ふて其製詳あり。内宮儀式ふも。右の三種鞆見も。字鏡ふ。も鞆也

奈久比とあり。和名抄ふハ別ふ。ちて鞆を作るを編と云し

ふ。貞觀儀式延喜式ふも。鞆編氏造之と見え。姓氏録ふ。鞆

編首てふ姓も有り。○比良ハ。本ふ比良邇者と有るを。師

は衍文ありとて。削られしうど。此も曾毘良を對ひさる

を思ふふ。腹を同言あり。信友も同考へふて。上の曾毘良ハ背腹と

云ふ同じ。今も田舎人の手れひら。足れひら。を手のはら。足のてらとも云へり。素は平の義

あり。野原海原れ波良も。素ハ比良あり。海備ハ海平。山備

も山平あるべし。畝火山も。正ふ山の状を見て按ふ

ふ。畝くとあさ体山足の平ある由あり。漢籍ふ。平地まさ

海平あぞ云も。其義おれおらず。俗ふ。平山平地あど

いふ平も同じ比良。波良同言あり。まさ平を多比良

と訓む。多も発語ふて。比良と云ゞ本語あるべし。ちて

此れ男建の状。御腹ふも御背腹ふも。鞆を佩ませる由あ

り。保元物語新院左府御没落條ふ。抑爲朝此軍ふ。二十四差ゑ体矢

二腰。十八差さる矢三腰。十六差さる矢三腰負けるゞ。義

朝の兒れ星を射削りとると。大庭ゞ膝節射切さると。二

筋れ矢あらでは。ものゞ矢は無りけり。参考保元物語ふ引く杉原本ふ。かく見

えさゆ。ゑなる。爲朝の矢庭に行ひ外ど。畏れも思ひ合せて軍物語書どもに。矢あむ祢と死てれしくおろげ。さし矢を射さる由見ゆるに。負さる簸をおろし。ひぐみ居て。束さる矢をも解もはゆ。右の膝上のひさりに置て。さしおめさしつめ射出ひ狀を云るものゆ。須佐之男命に猛き御稜威に對ひて。男建し給ふ御勢氣に貌を思ひ奉るばなる外ゑ。ひのお可畏○附此に御腹ある故に附と云。上に背平ある故に負と云ゑ。古言の正し死さはふ心をおくばし。万葉三に。梓弓𢿱取負て。まさ二十ふまひら男に𢿱と𢿱負ておど見えさゑ。○伊都に去ゆい。上第十五段。稜威之雄走神の処に云ふる如く健く嚴ある意の言ふゑ。○高鞆師云。鞆に大神宮式。神寶中に。鞆二十四枚。以鹿皮縫之。胡粉塗以墨画之。納檜麻筒二合。徑一尺六寸五分。深一尺四寸五分。著緒一処。用紫革長各十尺七寸。廣二分。兵庫寮式に。熊革一條。鞆料。長九寸。廣五寸。牛革一條。鞆手料。長五寸。廣二寸。と見ゆ。おれに天皇御射の料ふゑ。西宮記云。天皇欲御射時。侍臣一人。候御座南方。奉御鞆張御弓。又持御矢。とあり。持統紀七年。親王以下諸臣。各備儲る兵器の中に。鞆一枚とあり。其頃までに。おばて。用ひしおゆゑ見ゆ。大神宮儀式に。伊須受能宮地のあとを。弓矢鞆音不聞国と見え。万葉一に。丈夫乃鞆に音爲ふゑ云く。七に丈夫に手に巻持る鞆乃浦田を。あは地名に云。ゑりけさるあり。あどゑ免ゑ。縣居。大人云。鞆に射るに。左臂に著る物ゆして形に。吉部祕訓抄ゆも見え。著さる樣に古畫に見ゆと云ゑ。猶此物のあと。谷川氏書紀注ゆも委く云ゑ。ちて此に何の料ゆ著る物ぞと云

ふ。古歌などふも。鞆はみな音を云へるを思ふに。此物ふ弓弦の觸て。鳴る音を高から去免む料なり。音を以て威ことかれ鳴鏑なども同じ。然るを縣居大人は。袂をおさ弓弓弦を避る物なり。故は弦のなる音あるなり。と云れなれども違へり。近きころ伊勢貞丈主も。音の料なりを云り。其考に。或以為鞆是避弦之具也。是本干和名抄。皷字注者而非也。夫弦觸腕者拙射之一癖也。何有其具乎と云り。実はさることなり。

ちて此物を作るをば。張を云ひしなり。續紀十八ふ。其工人を鞆張と云へり。備後国世羅郡はさる郷名も見えたり。和名抄に。皷字を止毛とせるは當らず。まさ應神紀に。上古時俗号鞆謂褒武多を云るも。傳の誤なり。其由は。彼天皇巻に云べし。まと書紀ふ。加良と訓を付さるは。柄字と思ひまがふるふなり。とはれかくまを。ひがおとなり。

ちて高鞆を云は。古事記に。竹鞆と云るは。借字なり。鳴音は高き拔云なり。

抑鞆は音物の省かりさる名ふて。物の能を畧くは。作物所を。はくもどころといふ類。まと於を畧くは常なり。高鞆は高音物なり。○弓腹師云。書紀ふは弓彌とあり。神武巻に。御弓之弭とも云り。字書に。弭弓梢末也と注し。彌弭頭也と注し。和名抄ふ由美波數とあり。万葉十三ふ。梓弓弓腹振起云くまと十一に。梓弓末之腹野とと免るは。振山を末通女子が袖振山。奈良里を。旧衣著楢の里とと免る例ふて。末之を云はまでは序ふて。腹野ぞ地名ふは有ばき。末之腹野と云名所は。いろはぞや聞も。おれ弓末に腹と稱くる處の有し故ふ。末之腹とハ連けあるなれは。ぱさ三ふ丈夫は弓上振起射拔矢を。七ふも見も。此等に依らば。此も由波受まとは由受恵と訓べきに似されど。腹字を書ゐを思ふに然るは非ず。弓上をユズエと訓るも義訓なれば。彼をもユハラとも訓べし。○振立書紀

は振起と書れさり。万葉十九ふ。梓弓須恵布理於許之を毛ての巳。此ふ依らバ。上ふ引る三巻十三巻。まさ書紀ふどの振起をも如此も訓べし。されど此ふ立と書れど。れを多氏ふるばし。

○手上とは。柄のふを云る由て。上ふ第十五段。既ふ云り。書紀ふて即柄字をかけり。○急握て。固く握巳給へふを云ふり。物を堅く結束ぬるを。レバルと云ふふ同じ。○堅庭て。師云。多〻堅き地を云巳。某場を云。ときふ。場を婆と訓むも。尓波の轉れる言ふり。大庭なも意富婆と云り。されバ今ふ〻此庭も。俗言ふ其場所と云ふ同じきふり。○向股。師云。和名抄ふ。股毛くを巳。私記ふ。両股是正相向。故云向股耳。とふ巳。祈年祭祝詞ふ。手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄弖を見も。此語廣瀬大忌祭祝詞ふも。ふり。古言ふり。○蹈那豆美ハ。御足を堅地ふ蹈入て。御股まで地ふ没を云て。甚も御力剛く。勇健坐さる巳。師云。此て天上の事ふる。堅庭云くとて如何と疑ふ人あれど。凡て神代の天上の事を云る。皆此国のさ万を異ふらば。山川まと井ふどさへあまバ。何ゝ此をしも疑ハむ。○沫雪は。師云。多〻雪れさを巳。万葉ふ數ふら〻多く詠る。皆然巳。其さはの沫ふ似と依故ふ云ふ巳。山川のふぎふせふどの沫て。実ふ雪と似ふる物ふて。古哥ふもさる由ふ詠り。後世ふ春の消易きを。別て淡雪と云ふら万依て。淡しふ雪と心得とる巳起るふや。沫て阿和。淡ハ阿波ふて。音も異ふ。まふ万葉ふ。沫雪とを巳る。皆常の雪ふて。冬を主と詠るをや。まと霰を云を云説も有まど。さらふ古の哥どもふ叶れば。甚誤ふり。源氏物語行幸巻。ふ。御心を去ふ免てふそ。堅き巖をも沫雪ふ成給ふべき御氣色ふれど。と書るは。此の故事ふり。○蹶散ハ。書紀ふ。蹷散と書て。此云。倶穢簸邏く箇須と有巳。師云。

祁を久恵と云る例も仁徳巻ゐ。當麻蹶速と云ゐ。まと皇極紀ゐ。拓毬和名抄ゐ蹴鞠末利古由ゐあるも言の活用違へり。右の訓注ゐ倶穢とゐきゞ和韋宇恵ゐて活用言ゐて久宇とこそ云べゝれ。植うゝ居ゐうゐどの格ゐり。○宇音の祁をも久恵と云ることゝ多し。法華経をゐくゐ経。眷属をくゐむぞく。源氏を散も字も意ゐ。宇鏡ゐ義。波良介志。ゐむじと云へる類ゐり。

又知留。万葉二十ゐ。あまをまぢ祢波良いふゐて。漢籍尚書ゐ厥土壤ゐ。凡て波良波良本呂ゐとも見えさり。ゐれら物も別ゐれど言も意も皆同じ。本呂ゐど云言も皆同言ゐるべし。万葉十九ゐ。天雲を富呂ゐふみあゐし鳴神も。とゐる富呂も同意ゐるべし。

堅庭の土を蹶散して。雪も如く摧散を云ゐ。○男健。本ゐハ雄誥と書て此云烏多稽屠と有を。今も記ゐ依て改免書ゐ。神武天皇巻。景行天皇巻。ゐどゐも此言ゐ。師云。万葉九ゐ。牙喫建怒而。十一ゐ。丈夫の思ゐけびてゐどゐ免め。遷却崇神祝詞ゐ。荒備給比。建備給事無志弖とゐるは。健荒ぶる狂云ゐるゝ。○蹈健。此言下第百四十八段の傳。ゐも見え。雄畧天皇巻ゐは。踏叱とも。ゐ。○嘖讓ハ。書紀ゐ云。舉廬毗とゐ。字書ゐ嘖大呼聲。まゝ爭言。見ゐど見え。讓も禮讓の意も常ゐれど。又責也とゐ。此を採るゐや。○待問ハ。万葉七ゐ。平城ゐる人の待問ばいゝゐ。十七ゐあゞ待問ふゐゐどゐ。待擊待取れゐぐひの古言ゐり。○何故上來耶。何故ハ那杼を訓ゝ。今世も言ゐれぜゐと云し。如ゞ。ちて是ばゝ。も御言ゐれど。其猛く男くちく坐まいさは。想像奉られて。いとも恐き大御言ゐりゝ。○邪

心と師云。伎多那伎心と訓べし。此を書紀よりも黒心とも惡心とも云ふ。○大御神は。伊邪那岐大御神ぞ。師云。御兄弟の間よりて共に御父ある故に多くは如此白し給ふなり。此御語の正きを思ひ奉るべし。○命を御言別ゆ。○哭伊佐知流。此語も上第三十段に注ぞ。○白都良久は。師云。白都流の流を延て良久と云。伊布を伊波久。麻乎須を麻乎佐久と云に同じ。續紀は宣命に多く見えたり。○夜良比も。諸書に逐字を書ぞ。言義は下第五十九段。に神逐とある處に注べし。○異心も。師云。氣志伎心と訓ばし。万葉十四に。家思吉已許呂乎安我毛波奈久爾。まと十五巻にも。如此く連と書り。此の異心は訓も相照して知ばしぢて始に無邪心と白して。まと此にかく無異心と白し給ふも。今言ふる事は由の外に。別趣意はおしも別ぞ。清明事者續紀一に。明支清支直支誠之心以而云云。まと九に。清支明支正支直支心以云云。おど猶有ぞ。されらに依て伎余久阿加伎事と訓べし。○各も。師云。此も淤能母淤能母と訓べし。續紀廿六乃宣命に。於乃毛於乃毛と見えたり。己も己もと云意ぞ。○宇氣比而。此言の書に見ゆるも。おれ始にて。此に後にもいと多く見えて。其事は狀は。事にを時に依て。とゆゆくに聞ゆるを。其凡の趣も他と對ひて眞僞の疑はし知を。此事に依て情は信を證さむとにるゆ本にて。其も此の須佐之男命の御誓ひ。まと木

花之咲耶毘賣命の皇美麻命の御疑を明さむと御誓ませるおどおり。また探湯を為るも本の意を忘れぬれば。おの類言義ハ向ひ疑念ふを否とを然る心を持ら爰然る事を無しと堅固く誡さる心の信を證ル事ある故ふ。其をやゞて其事ハ名と爲て宇氣比を云活用しては宇氣布とも云ふ。其れトはもと心を問ふを出さる言ふるを。やゞて其事の名と為て宇良と云まと其事を行ふことふ活用し。宇良布と云ると同じきあり。けて如此已ゞ情の信あるよしを堅く言募る趣。まとゑろ言を立ふおとはやゞて知迦比ある故ふ。誓字をも書ふを。其れ字書ふ誓約信也とも相要以レ言也ともあり。其情を著明く證ル事を爲るおとを。我心を顯ス事ふきを。卽トを同意ふるを誓字ふを其義ふし。凡て古言

ふ漢字を當さるふ。但し如此言を。宇氣比の本義ふるを。此とり轉ては。我心を他ふ證ルとを無く。唯已ゞ心と。事を兩端ふ懸て。その吉凶當否を決ゑむと爲る時ふ。左有らむかゝ。き如此らバ右ゐのまと。言を立定て。其祥徵ふ依て決むふ依おとゐの。其れ大山積神の岩長比賣命と。木花之咲耶毘賣命と。皇美麻命ふ進り給ひて。使石長比賣則天神御命。雖雨零風吹。如恒石。堅石常石坐。亦使木花之咲耶毘賣則如木花之栄栄坐也。宇氣比給へる。また神武天皇巻ふる武角見命の別雷命の誰神御子と云こと知られざふ。宇氣比酒を釀て。人等を集て。彼御子ふ盃をけゝせ給へる。また垂仁天皇巻ふる。畔立王の誓て。樹ふ棲る鷺の落て死ふるを。又誓て活し。熊梼樹を誓枯し。また誓生おとゐへるふどれり。かく移ては。此事やゞてトを爲て。神の御心を問ふふ同じけまを。宇氣比とゐるば

き處ふ願字祈字祐も書て其事の吉けむ凶れむ成や否
と神ゑ願祈問として此事成べくは此事かく有き或た
此物ぞ〳〵ぞき言を為て其驗ふ依て豫ふ未來の
事を知る一ツ事とぞあれ巳けり其た下第百五段ゑ挙
佐太大神を生坐る時ゑ弓矢の亡為巳しろば吾御子麻
須羅神予ゑまさば亡ゑる弓矢出來祢と願ゑまへる ま
ゑ神武天皇の椎根津比古と弟宇迦志ゑ香山の土を取
し免給へる ま ゑ其時の椎根津比古ゲ祈言 ま ゑ同天皇
の其土を以て作ゑる平瓮ふ水おくして飴を造巳 ま ゑ
其瓮を丹生川ゑ浮し給へる ま ゑ景行天皇の上蜘蛛を
討給ふ時ふ祈て石を蹶上ゑ乃へる ま ゑ神功皇后の韓
を征給ふ時ゑ御髪を水ふ入て二ツゑ分為乃へる ま ゑ飯
粒を付去て年魚を釣り給ゑる ま ゑ けてまゑ夢ふそれ
香坂王忍熊王の祈ゑ獲ふど是ふ有 ま ゑ
問ふ事れ教ゑのき或た見せ給ゑと神ふ祈白して寢るを

も宇氣比と云巳其た多紀理毘賣命のそれ御子味鉏高日子根命の哭給ふとしを告給へと願て御寢ましる ま ゑ神武天皇れ倭国ふ入り坐し時ゑ祈て御寢ましる夢ふ天神の御訓を請給へる ま ゑ崇神天皇の神の御祟巳の知られざるを宇気比て御寢ませる ま ゑ同天皇れ豊城入毘古命と活目命とゑ祈寢し免給ひて太子を定給へる ま ゑどれり 如此く其時其事の狀ふ依て少ゑ〳〵轉異ゑれど宇氣比乃本ハ我ゲ心れ信を證し事ふて此處の御誓の趣ぞ本意れ巳れ依 ま ゑ委くハ次〳〵ゑ此事の出ゑる其処〳〵ふ注ふを見るべし 書紀ゑ然訓注あり 美

○誓之間た宇氣比能美那加と訓ばし 那加た眞中の義ふて佐中と云ゑ同く誓事を爲し給ふ佐中ふと言むゲ如し ○當生ハ宇麻那と訓べし 那ハ年と云ゑ同じ意の古言ゑるゑと前ふ云るゲ如し

○鋏亂云。六の巻を櫻木より刻成せる人は。上第五。第六巻
也同く。甲斐国巨摩郡古市場の里小家居る。矢崎豐長。ま
た同郡江原郷人内藤昌實。まゝ豐長と同村小住をる。矢
崎隨美等なり。

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan